古史傳

自第八十九段
至第九十三段

十八

和書門
類 一
號 六〇二
函 三五
架 五五
冊 二

内閣文庫
和書
類 一
號 六〇二
冊 二
函 四〇
架 七

内閣文庫
番號 和 20261
冊數 22(18)
函號 140 183

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

浅草文庫

古史傳十八出卷

平篤胤謹撰
男 鐵胤
孫 延胤 續攷

神代中十出卷

故是大國主神。平國出時。到坐出雲國伊佐佐出小汀而爲御食出時。海上有人聲故驚而求

出。都不見物。頃時而。甚小神。自波穗。乘天出蘿摩船。而以佐ニ伎羽爲衣服。隨海水而漸浮到焉。大國主神。卽取而置掌中。翫出則。跳而齧其頰矣。故以爲怪物也。雖問其名。不答。且雖問所從出諸神。皆白不知矣。爾谷具久白云。此者久延毘古必將知焉。白則。卽召久延毘古而。問出時。此者產巢日神出御子。少毘

古那神也白矣。

伊佐〻出小汀に出雲郡ふある濱あり。はと伊那佐之小汀とも。伊多佐之小汀とも云。委くは下ふ注ふ。第百十五段の傳見ぬし。○爲御食之時は。美袁志世須時爾と訓べし。本ふ當飲食是時と云ふるを。師の訓ふ依て文字を成せり。○海上は。和多能閉ぞ訓ばは。宇那婆羅とは訓まじきことぞ。○有人聲故は。人聲世禮婆と訓ゐし。此は師の訓ふ依きゆ。○求之都不見物は。美給布爾都爾物毛美延受と訓べし。此も師訓ふ依り甚小兒故ふ。聲はみして物は見えざはて文を成せり。

外ゐ。○波穂は。師云万葉十四ふ。奈美乃保能。伊多夫良思毛與。波穂之甚振ふり。ぞ有ふ依て訓べし。末ふも拔十搦劔而逆刺立浪穂云〻。御毛沼命者跳波穂云云ふどゐゐ。神代紀下ふ。於秀起浪穂之上起八尋殿云云。秀起此云左岐陀氐屢。まと神武天皇紀ふ。浪秀とゐゐ。凡て穂とは。著く顯ぞ見ゆる事を云て。波穂は。書紀ふ。秀起とゐる如く。左伎は。花の咲ふどれ左久ふり。万葉十四ふ。左久奈美ぞもと兒。浪の白く高く立さはを云ふ古言ふ。○自は。次の浮到と云文ふ係て見ばし。浪上なと云ふぞ外め。自船自徒ふぞの自ふり。と師は言きとるゞ如し。○天之蘿摩船。天之ぞ云は天之蘿天之眞拆ふどれ例外ゐ。蘿字諸本ふ無れど。延佳本ふ依て加ゑ。師は。ちらしらふりと言きゆきど。書紀ふは。以白蘓皮爲舟とあゐ。本草和名ふ。蘿摩子。和名加〻見と見え。医心

方りは加〻毛と見え和名抄ハ也末加〻美とあり白蘇ハ同書ふ也末加〻美とあ
ゆ和名抄ハ夜末賀〻美と見ゆ徐長卿和名比女加〻美
ゆ見ゆ医心方ハ加毛と云ふ物類稱呼ふ蘿摩ハ俗ハ乳草蜻蛉乳加賀良比
賀〻芋燒所花碁賀長ふと囲〻所〻ふて名替ゆ乳草と云
は蔓を引切れば乳の如き汁出ゆ賀〻芋ゆ云
ゆ其根の芋ハ似とれば乳草燒所花と云ゆ其花の形切
もぐさふ似とゆ云加賀良比
はと碁賀長と云由ハ知らば物類稱呼ふ蘿摩ハ葉ゆ
形細長く厚く兩對ひて表ふ薄白く筋あり好事ゆ人ゆ茶の代ゆ
用ひまと其根を炙りて食ふ甚甘し葉
莖ともに日乾て焚バ惡臭を消ゆ宗ゆ細長く三四
寸ゆ一ゆ有て糸瓜ふ似とゆ名けて藿瓢と云秋の末熟
ゆて枯て二ふ和ゆ中ゆ綿の如き物出る是を俗ハ和

ゆ波牟夜と云と云るゆ如く其殼を割とるは舟ふいと
ゆく似とる物ふゆ白蘇徐長卿ともハ蔓を引切れバ白汁の出る故ハ共ふ加〻美てふ名を
負るふらむ宗葉も大小異ふきど似とり乳草ゆ蘿摩ゆ乳
ふき婦人ハ用ひて乳を出ゆ物ふゆ北山寿庵ゆ医
方考縄衍と云書見るべし後拾遺集ふ曉方はゆ朝皃
を加〻み草ふも見せてけるか乳但し此哥ゆ師も引き
は此ゆ似とる草ふり丸き葉の石ふ這ふ草ふり鏡草
ゆ云て加ゆ似ゆ生とふ鏡草ゆ
げみゆ似ゆそゆ生とふ鏡草ゆ
とゆ別草ふて豆蔓ゆいふ物ふ似とゆ蘿摩
紀ふ鷄鶏と書て此云娑〻伎とあゆ和名抄ふ文選鷄鶏
賦云鷄鶏小鳥也生於蒿萊之間長藩籬之下和名佐〻木
と見え字鏡ハ鶏左〻支とあゆ
ゆ佐〻伎ゆ書
ゆまと豆久弥加也久支れ
ど云訓をも付とまど加

ヤクキは鵡鳥豆久弥ゝ鵡ふる物なや。仁德天皇ゝ大御名を。古事記ふ。大雀命と書とき。書紀ふゝ大鷦鷯と書とゆ。此ゝ記ゞ雀字を書ゑるゞ誤ふ由を知し。然むゞゝ事と思はる。此御名の由緣の故事を思ふ。宗ゞ鷦鷯と通えとり。然きむ書紀ふ。雀字ゑ佐ゝ支と訓る所もあるハ誤ふ。纂疏ふ。鷦鷯俗云美曾佐ゝ伊是也と云ゆ。今も然云鳥ゝゆ。名義ゝ。谷川氏ゝ。佐ゝ木稱其小也と云ふ如く。宗ふ是ばゝ。小鳥は無れむ。佐ゝ伎と云るゝらむ。美曾佐ゝ伊と云るゝ此。鳥。溝。辺。籬の下ふゞゝ。小虫を求る鳥ふきむ云ふや。是ふ就て前ふ思ふゝ。鵡鳥ゑ加夜久伎と云は。萱漏の義ふ漏と通ゆきむ。佐ゝ伎と云ハ。笹ゝらむゝと思ひしゝゞ其ゝわろかゆき。ちて此を古事記ふは。内剝鵡皮剝爲衣服と云ゝ。鵡ハ決ゝゑ鵡ゑ誤れる

外ゝ。まと若くゝ。鵡字を佐ゝ伎の事と思ひ紛ふて。當とるふゝ有ばし。然きむ縣居翁ゝ。佐邪伎と訓れとゝ當きり。然るを記傳ふ。佐邪伎ふらむ。書紀の如く。羽とこそ云ばゝきゝ。皮と云むこと。鳥ふハ似ゝはしからばとて。蛾字の誤ゞゝて。此牟志ゞ訓て解きし說ゝ。却ゝゑ信ゞとし。○掌中は舊訓ふ多那宇良と訓るふ依べし。手裡ふゝ。手心と云も同じ義ふゝ。○翫之則見給比斯加婆と訓ばし。字ふ隨ひて。毛氏阿曾夫と訓むゝ。漢籍風の訓ふゝ。○頰ゝ。和名抄ふ。豆良。一云保く。ゞ有ゝ。齧ハ俗ふ齧付ゝゆ。此ゝ下ふ。產靈神の御語ふ。不順教養云ゝと詔ふる神性ゝ。然るを。大國主神ゝ輕慢ふを云ふゞ釈ふ說どもは。聞ゝくも煩さし。○所從之諸神ハ。師云美登毛能神多知と訓ばし。大國主神の御從者ふゝ。○谷具久は。本ふ多迩

且久とあひ師説より依て且れ具の誤あることを知て改免ぬ。師云万葉五ゐ多爾具久能佐和多流伎波美云く。六ゐ谷潜乃狭渡極云く。祈年祭詞ゐ谷蟆能狭度極月次祭詞ゐもあり。あどゐのゆ。此れ蟾蜍のあとよて。祝詞より蟆と作さるれ蝦蟆よりて。そハ只れ加閉流あれむ。比伎賀閉流とれ別れるゲ如くあまども。古通はし云ることを。漢籍ゐまも多し。まと祝詞の今本より蟆を加麻と訓まど。字音あまむ誤あゆ。縣居翁れ。具久と訓れと るゲ當れることを。万葉グと照していちゐるし。具久れ鳴聲ゐをまゐ名谷を云は。物のはざはゐ居物ゐゐ故ゐ。久く蟾蜍は蛙の類れ總名より。○今云和名抄より。唐韻云。蛙、蝦蟇也。和名賀閉流。まと青蝦蟇、兼名苑云。蝦蟇大而青脊。謂之土鴨。和名阿乎加閉流。まと兼名苑云。蟾蜍似蝦蟇而大陸居者也。和名比木と伊。今按ふより。蟾蜍れ具久と鳴物より非ず。青蝦蟇れ田沼谷相ゐどゐ居て。常より具久を鳴物ゐゆ。師説の如く。鳴声より依て名けむりハ。是ぞ谷具久と云べき物ゐり。山田れ曾富騰のゐとを云るも。田より居る青蝦蟇ぞ由有てきこも。然まど雲異わざあゐ物れ蟾蜍ゐり。此れゐゐ熟考ふべし。さて總て加閉流は。小虫を吸取て食ふ物れるゲ。中ゐ蟾蜍れ引息のゐよき故より。比伎とれ云ゐるべし。此物の霊異ヒざある事は。漢籍ゐも見え。世人も知れる如くゐれど。今此の事も由ゐのヒて所思也。本朝文粋。村上天皇御製古調詩より。又有異躰者。名号為最明。野鎚誰得辨。蝦蟇尤耐驚とある。此野鎚蝦蟇の對句れ意を按より。かの異躰者の形狀。野鎚蝦蟇より似とり。かくる者れ誰ゐれ辨知らむ。見てれ誰も驚きゐべし。と云意ゐ。又は野鎚と云とも。誰ゐ此者を辨知む。蝦蟆も此を見ど。驚くべしを云意ゐ。若後の意ゐ。野鎚蝦蟇れ物をくく辨弁知る物ゐして詔弁るれまば。此ゐ由ゐり。○今云。野鎚れ何物と云こと未見當らぬ。野神の名を野鎚と申ゐとハ別ゐり。出羽れ秋田ゐどゐ。野鎚と称ふ物あり。已いはゐど其形を見ゐど。見とる人の言を聞くゐ。形槌の如くゐを。目口れゐまを。尾も頭もゐき物より。蛇れ類と見ゐは。草村をり急より出て。蜻返ヒより。追ゐ免を齧付むとし。貓殺ゐどをも取こより

と有といふ事也。御製の野鎚も此あらむう。また蟾蜍の大
あるも。背の径一尺ぞのりかれるも珍のらびとぞ。此も甚
大きれほは頭をり背ふ長き毛生て立歩ぬ。赤子の如き
色をかして人を欺き。はと人家よ磯あどを打ことも有
也。ゑう大ぬく成れるをむ。禿切と云かり。此も已に見ぬ
ど。能知とる人の物語あまバ。因ふ此り記し出ぬ。また按
ふよ。徒然草よ。野鎚と云見え。新撰字鏡よ。蠍蟹
乃豆知。また蝮。蜻也。乃豆知と有り。考合去べし。○久延毘
古名義次ふ注去ぢし。師云神名式ふ。能登国能登郡ふ。久
氏比古神社ふ。氏字若ハ延の誤よれ非るう。廻国雜記
ぬと云所よてを免る。心のらうきにまひよもあれぬら
むやちとび何をくゑの里人とふるを見れむいよ〳〵
久氏ね。久延の誤ったおぬ。また。同郡ふ。宿那彦神像石神
とひ氏ふても延と同韻ふり。
社と云も見ぬ。今云まと隣郡羽咋郡よ大穴持神像石神
六月九日。能登国大穴持神。宿那彦神像石神社と云もあ
二前。並列於官社をあれむ。清和天皇紀よ貞観二年
信り由有げあり。○召久延毘

古而云く。次ふ此神者。足雖不行云くと云ぬ。此ふ召を
云こと心得がと紀よ似とれど。謂ある事ふ。次よ云法
し。○産巣日神。此ね古事記ふ。神産巣日神と云ふ。
産巣日神と書るは。書紀ふは。高皇産霊尊の子とも有て。
宗ね男女二柱の皇産霊神ね。産霊ね御間ふ生坐る故ふ。
ゑり二方ふ語傳ゑるふまむ。二神を兼てかく文と法ふ
ね。委くね既よ云ふ。第一段の傳見べし。○少毘古那神。此御名本ふ少
名とあるを。書紀ふ少彦名神と有
るよ依て。少の下ね名字を畧きぬ。師云名義。少は書紀ね
纂疏ふ。以形體短小爲名と云ふ。然も有べし。須久那志と
は。後世よは。多く多紀よ對ふて。物の数ふれみ云ふぞも。

古へは大(オホ)に對(ツイ)て。小妃(オホキサキ)おとよも云(ヒ)ども万葉ゐハ小彦名(スクナビコナ)と
もかけ(ル)。官職よも大少あ(リ)て大をひて毘古(ヒコ)も那(ナ)も。例
於保伊少を須奈伊と云り。
比(ヒ)美稱(タヽヘナ)ゐゆ。神名式小越前国坂井郡ゐ比古奈神社と云
もあ(リ)。ゐと堺原宮天皇の御子ゐ少名日子
建猪心命と申(シ)御名もあり。まと
宿奈麻呂てふ人名も所ゐあ(リ)。

故爾遣使而。白上於神産巣日(カレコヽニ遣ダレツカヒヲテ白マヲレアゲニ於神産巣日カミムスビノ)
御祖命則。詔曰。此者實我子也。(御祖命オヤノミコトレカバ則ノリタヽハク此者ハコヽトニアガ實ミコナリ)
吾所生子。凡有千五百座。其中(吾所アガルウメミコ生オヨソアリ子チ凡有イホクラソノナカニ)

最惡而。不順教養。自吾手俣漏(最惡イトアレクテズ而レタガハヲレヘコトニヨリアガタナ手タクキ)
墮出子也。愛養而。與汝葺原醜(墮オチレミコナリ出メグミヒタレテ子也イマシレアレハラレコ)
男命。爲兄弟而。宜作堅其国詔(男命ヲノミコトナリ爲アニオトトニテ兄弟テヨトツクリカタメソノクニノリタヒ)
矣。故少毘古那神。亦謂手間天(矣キカレ故スクナビコナノカミヲ少毘古那神ヽタヽヲス亦謂テヽヲスアマツ)
神。亦謂小名牟遲神。亦云少乃(神カミト亦ヽタヽヲス謂テヽヲスアマツ神カミト亦ヽタヽヲス云ニ少スクナ乃スナハチ)
御神。(御カミト神カミト)

産巣日神出長子也。故顯白此神所謂久延毘古者。於今云山田出曾富騰者也。此神者。足雖不行。盡知天下出事神也。

遣使也。使乎麻陀須と訓ばし。遣を麻陀須と訓む由は、第百四十六段、奉出の処に注し。○神産巣日御祖命。皇産靈神二柱坐ばゞ中に。神産巣日命は女神に坐て。内事を掌給ふ故に。此神に白上給ふ故に。○白上師云白は右の狀を云〻と白ばかり。上は少毘古那神を。高天原に率て詣で〻御祖命の御許に獻るを云。下文御祖命の詔に、此者宗云〻と詔ふは、彼蓑雲劍また所々と見給ての御言なれば。多白上於天照大御神と所のるに同じ。彼も上は即其太刀を獻る歟云ひ。俗に多く白ばかりは異なり。上の言輕く見ばからば。○實は其太刀をは久延毘古は。云〻白せるは如何と。使神の白ばを承て。宗に然れりと詔ふかひ。○手俣は師云縣居翁は。多那麻多と訓は多能麻多と訓みまた書紀に指間を多麻〻多と訓る所もあり。いかゞ。那は之に同じ。手心手裏手末なども云例なりひ。さて

古事記中の俣字延佳本は股と作り、おもたちの
ちらは改おるあり。俣も字書ハ見え、此方の古書
ふあまく用ひて今もあり地名あどは此字なれみ
書來れり改むべきは非ず此外も漢国ふあき字はと有
きども、ならぬ意ふ用ひとふる。○漏墮之子。古事記ふ久
ぎ古書ふ此類いと多し。
伎斯子とあり。今書紀は漏墮とある師云漏は上よも
を合せて文を成しおり
大名牟遅神の事。自木俣漏逃而去と云ひ万葉十九。
伯勞鳥之草具吉。十七ふ保登等藝須木際多知久吉はと
波流乃野能之氣美登妣久い鶯云くあぎあり。久具流と
云ん。此久くを延とる言あまむ久伎ん久具理と云ふを
あり。此の文は宗我子也云くと、和おろの間は三さび重
祝て子と云ことあるん古文あり。今世ふ文章かく
と思ふ入れ。かく同言の重あるをバ拙し
やあて省くん中くは古ざまふあらば。○汝と指て詔

ふは。此時大国主神も共は參上給ひ如くあまど使
ふても。如此詔ふ法き形ア。○兄弟。此も阿邇於登を訓べ
し。兄弟と形ア。心を睦び力を戮せてと詔ふ外ア。後世は他人ど
ち。兄弟を為ことあるを義兄弟と云。此ん産霊神の始め
て命せ給へる事あまむ心ざはとく一おバ最宜き事は
ぞ有ける。○宜作堅其国とは。師言ひ如く。天地初發之時ふ天
神の詔以て。伊邪那岐伊邪那美神ふ。修固成是漂在国と
あて。天瓊戈を賜ひ。斯て豫美国段は。吾與汝所作之
国未作竟云くとある。其未作竟給ざる所を作堅めて。功
を竟とと外ア。師云。今かく少毘古那神を副て。助けし給
給ふん。彼沼矛を賜ひしと同意はて。深き所以あるばし。

其国とは。高天原を卍。此国を指ふ御言ゟ卍上より引る天神の詔りハ。是を所るに。そのゝみ天地相去未遠故ゟ。御目れあさりふる故ゟ。〇手間天神を。大三輪神鎮座記ゟも。此と同傳を記して。此故傳曰手間天神也と所るゟと。徴ふも云ふゞ如し。御祖命の御手れ間をり漏墮とる天神ゟ坐ばゟ卍。まさ是は就て按ふゟ。間を麻う。然るに間と云語に。彼と云に。俣の省語ふれ非ざる間を云て。俣を云ゟ。意通へざゟ卍。出雲国意宇郡筑野村。間瀉の海中ふ小嶋あり。手間嶋といふ。此嶋ふ手間天神社と云所卍。祭神に少彦名命ゟ卍を。書等ゟ見えと卍。俗人訛りて天神と濁りて唱ふ。菅原大臣社と思ふとぞ。杵築大社記ゟ。此島に一蓬萊とも云べき風景ゟり。毎年除夜ふ。大海の無量れ島賊魚ぞも。此島の辺ゟ集まるを。此浦れ漁人ども網を曳てとるふ。神れ祠へ。参詣遂とる魚に。

背上ゟ黒点あり。参詣遂ざふれ黒点ゟし。是あま祢く知る所ゟり。〇小名牟遅神。ゟの御名も。徴ふ云る如く。戒壇院神名帳ゟ。大汝小汝明神と所ふを採ま卍。大名持神の御名を。万葉六ゟハ。大汝ぞも書ふを採ま卍。ゟまざ。少彦名命を。小汝とも申せるゟり。大名牟遅の。大名ゟ對ゟて。小名と申せ卍。然まざ須久那ゝと云ばきを約とるゟり。凡て同音の重ゟれる言ハ。一ゟ的暑く例多し。ちて上ふ。皇産霊神の御詔ふ。爲兄弟とは有まど。誰ゟ兄。誰ゟの弟と云ゟを知らまざふを。此大名小名を申に御名ふ依てぞ。兄弟れ事の詳ふ知らふゞ卍。大兄少兄の義を。も思ひ合べし。〇少御神。此御名に。息長帯日女命の大御歌ゟ。須久那美加美と。御詠ませる を採ま卍。下ゟ引く万葉七の哥ふも。ゟを卍。〇産巣日神之長子。長子に

美古能加微と訓ゐし。御子之上は義なり。書紀に所々に長子をかく訓り。なを第七十六段の傳に注せるを見て。ちて此傳は。神祇譜天圖記に。大己貴神與產靈神之長子。少彦名神。共經營天下云々。と有を採れるなと。既に徵に云り。右文は神名祕書に引と侫を此に用ゐる処のみ多。甚く切免て再引とゆ。此は他の書等に見ざる。最も妙なる正し記傳なり。其由次段に注ふを見ばし。（顯白とは。誰も知ざりしを。をく見知て。其と顯はし申せしを云。末下に。此立御前而仕奉之猿田毘古大神者專顯白之汝送奉ともあり。此に依て思へば。神名は更にいはば。人名なれども。某と顯はし知ることは。最好德を為とるものなりけり。）○山田之曾富騰。師云。なる〳〵は文を按ふに。

當時久延毘古と云しは。即今世に至ふまで。山田は曾富騰とて有物是なり。然るに久延毘古郎。曾富騰のことなり。ちて曾富騰は。後の歌に曾富豆とを免る物にて。清輔朝臣の奥義抄に。田にぞろかしに立と侫人形なりと云り。山田を。縣居翁は。地名なるべしと云まし。曾富騰を。其処に鎮坐神の名と見られしなれど。此の語はさまを。なく思ふに。ちは聞え。もし尋常の神名ならば。坐山田曾富騰神。なぞ〳〵。おそ有べくれ。まと或説に。後哥に免る。山田のそなぢと云物は。多〳〵此に。足雖不行とあるに依て。此神名を取て。擬へて名けとる物なりを云侫も惡し。古今集に。足引は山田の曾富豆已ちなり。我をなしを云うれはし免こと。後撰集に明暮し守侫とはみをからせ故〳〵。袂そなぢは身とぞ成ぬ侫。拾遺集長歌に。小山田を

人に任せて我れ只袂そぬれおの身を形して云く曾根好
忠集に山田守そぬれおの身も今れおのぬれおの舟屋形をぬれ
ち知見ぬぬぬ。外どを免り。続古今集に僧都玄寛山田守
てぬまだ問人もれし此哥よりて曾富豆れ僧都を名
以て名けし物と心得るれ古を考へざ依非説あり。
義れ。或人雨露に所沾そぬぢて立る由おぬと云ぬ。添水の意
あど云説れ云
ふも足らぬ。今按に曾富豆と云は。後れおをぬて。本れ
曾富騰おまだそぬぢ人てふ意おや。遲毘登を約れバ騰とおるれり。そ
ほぢと云意ハ。武烈天皇巻影媛歌に。儺岐曾袞遲と見ぬ。
後哥に
も多し。山田れ山れ田おぬ。遠飛鳥宮段に。輕太子御歌に。
夜麻陀遠豆久理と見ぬ。今云山田れ門田に對て思ふ
に山下まと山間おど總に人離

れる地に作る田を云べし。然まバ鳥獸の殊に多くぬ
く故に曾富騰をぬく立おけを山田れとハ云來ぬし
おら
む。ちて久延毘古てふ名も世と共に雨露にうるれ風
に吹破らまおぞし。身體の壞れまと体意に有。
む。久豆禮を久延と言れ古言おぬ。今云此師説に依て思
る式に能登国能登郡おる久氏比古神社れ久氏れ久都
礼の約まる言おらむも知ぢのらば都礼は氏と切まま
ばお
ぬ。万葉十四に。伊波久敵乃。はと三に。河岸之妹我可悔。
河岸の崩と云
うけとるれり。仁德天皇紀歌に。以播區娜輸。岩崩れおぞ
おり。
ぬぬ。○此神者云く。師云凡て古れ。禽獸れ更にも云はぬ。
さらぬ雜物までも。靈しぬのまバ。皆神と云し例おまれ。今
此曾富騰をも。神を云るおと。異むぢきに非ぬ。此神とある
に就て。

山田のたどろしき事非じと、疑ふ人も有ぬべけれども、所謂と云言あどを置るよりても、尋常神からぬ事明けし。

○足雖不行（アしハヤルカネドモ）をは。作り立と依まゝ〳〵ふて。何處（イヅク）牙も動らぬを云ふ。○盡知天下之事（コトゴトニシルアメノシタノコト）天下は万葉十八ふ。阿米能之多（アメノシタ）とのり。如此（カク）訓べし。師云。能を我と云るを。古（ヒ）より見えばとろし。けて此稱は。天照大御神の所知看（シロシメ）ふる。高天原ふ對へ奇。此国（ココ）土を謂へる稱ふ。式此祝詞を始め。數（カズ）見えと当る古言ふ。

師も古事記より。神倭伊波礼毘古天皇の御語より。天下と詔牙る処ふ。此語を釈て。思ふ本漢籍より出と称りて。神代とのの古言ふてもあらじゝ。然まど甚く古（ヒ）をり。普く云ふまぬる言ふてハ有ふり。此天皇も御代ふどよりも。漢国をり。書籍渡参來て。言初此称あ依べゝらざまども。天皇も御代ふどよりも。漢国をり。書籍渡参來て。言初と称を以て。古（ヒ）牙及ぶ。やして。語り傳へと。る外依べし。と言れ初まど。然もあ依べし。

けて文意も此神足ハ行ゝ祢ず。世間おまじくおぼ也。

此事を知らじをハ思牙ぶも天下（アメノシタ）も事は。洩（モラ）さば盡（コトゴト）ふ知まを依神ぞを云依ふ。

記傳より。此文の下より言ましは。此も如何ふる故ともをゝ。難（ガタ）ゝまど。尚（ナホ）ゝ賞（コヒ）ふ強て。いまだ書紀の傳を考るふ。大己貴神。己命（ナムチ）も己。大（オホキ）ふる功績あるより。尚（ナホ）ゝ給ふ意見えとり。然れども己。命一柱のカよりても。功終（ヲヘ）難（ガタ）ゝめず。然るより此。山田の曾富騰も。多（オホ）く人も形ふと云をゝ。人も為事をも。えせば。足もえ歩行（アルク）ば。其状（サマ）貌（カホ）はと。甚（ハナハダ）醜（シコ）く賤しげふる物も。も極ふり然るを此物しも。天下の事を尽（ツクス）く知て。今少（スコシ）毘古那神を顕白せるより依て。其神と相並びて。大功を終（ヲヘ）給ふ。古牙り。然れど己大功ふ。とても。必ふこゝ難く。まと容貌（カホカタチ）見苦しく。微賤（イヤシ）き者とても。必ふ葉がとしとの意ふるばきゝ。足雖不行を云る。坐ら天下の事を知を云意はもとをふて。大名牟遅神の。天下を経行き給ふふ反（カヘ）對る意も有ぬべし。と言れとまど。其意より非じとれを。然依も此神（カムゲネ）實（ジツ）は。鳥獣を驚（オド）さむ料ふ。假初も如く作ふ立と当る物ふし有まず。冥（ヨミ）は靈も有ぬ。ぬ非ざ依ふ。

但し中昔の書等ゐも見え、今世ゐも何と外れる人れ作き
る像、まと画きと云る物ゐなどよも甚異ゝる霊ゐ云る事も多
かゐよ、合せて思ゑず、曾富騰ゞた云へゞ、神代の神れ造
きるゐまず、霊有ゝむこゞ、然も有ばしとた思ひゐがら、
天下れ事を盡くゐ知と云ことの、餘ゐ云ゐ多〳〵この外ゐゐ
就て、熟考るよ、淺き由縁あゑげよ所思も、其はまだ此り、
足雖不行と云るゐ、上文よ、召久延毘古而問之時云〻と
有まず、言語ハ更ゐゑ召ゐ歩み參出とりとも聞も、
然れば此神はしも、體よ固有れ霊魂た無れゞ、他を問
ゐ〳〵事ゐ從ひて、神まと人、或た物ゐまき何ゐはれ、其事
を知れる霊れ憑託て誨ふる故よ、天下れ事の、悉く知ら
ゐ〳〵よて、冢は曾富騰の、本を知れるゐは有はじく所

念とゑ、其た古くめ今も、巫祝ゐゞの、憑人と云を立て、神
まゐ人れ霊を祈ゑ憑せて、物問ふこゞれ有も、云ひ以多
行ゝず、同じ意バ孑よれむ有ゝゐ、神の道をとく辨へて、
人ハ、をく擬とらむゐた、久延毘古、神を行ゝせ、言はと此、
語ひ、むゝりの験た有まじき事ゐも非ゞのし、
神の、天下れ事を盡く知て在る由を辨孑て、此を顯白せ
ゑし谷具久も、はといみじ、神ゐゐむ有ゝゐ、師言の如
く、此久延毘古れ故事を讀ても、吾ゞ古傳の、漢籍れさく
ゞゑとるとは、遥ゐ異よて、直く安らかれし事知まて、
いゞ貴し、書紀よ、此類の故事を捨て省かまし、大三輪神鎮
座記ゐ、別宮小社之事と云處ゐ、曾富止神、社久延彦命、立社

奉齋年号未考。世の中。今も有ばれば。天下れ事知と成はあ去
く思む人も。必常ふ齋祭るばな神ふおそ。世の神主と有らむ者ハ
更よも云はず。凡て神霊を乞祈奉らむ人も。此神れ由縁
を知らぬも有べ〻らば。然まず漢風ふ成果さらむ者は。
左まき右はぬ神れ御囲の人ゐらむ者も。
也〻〻粗略ふ思ふべきふも非ずし。

故自爾大名牟遲與小名牟遲
二柱神相竝而一心戮力國巡
作堅出時伊邪那岐神出麻奈

子坐熊野加武呂命。亦云熊野
加夫呂岐
櫛御氣五百津鉏神鉏所取二
野命。
而於二柱神事依賜矣。於是殖
生葦薦菅而如水母浮漂出國
地固造矣。因曰葦原國爾時稲

種生墮處於今云多禰也。

故自爾れ。神産巣日御祖命の御命ふ。兄弟と爲て其国を作堅めと。詔ひ遣せ賜へるを承て云ひ。○相竝ぶは。相共を云ふ如く。互ふ勝劣ふく物し給ふ状ふゆ。○一心戮力は。本ふ戮力一心と有て。一心を心乎一尓志氐と訓とまど。義を得て。心袁一備力乎戮世と訓ゑし。○国巡作堅之。大名牟遅神も。前ふ須佐之男大神の御霊を賜りて。国作ふ功み給ふことは。其本業ふるふ。今はと産霊大神の御命として。少毘古那神を副給ふれば。益々ふ力を得て。相共ふ国巡ひ作堅給ふれ

ひ。万葉七ふ。大穴道少御神も作せる。妹勢能山を見らくし吉も。六ゆ。大汝小彦名能神こそは。名著始々ふ名耳を。名兒山と負て云く。十八ふ。於保奈牟知。須久奈比古奈野。神代欲里。伊比都藝家良志。云く。かく趣ふ云傳ふ多ふも。皆天下を作巡ひ給ふ功ふ依てふひ。（あゝ次くは注ふを見べし。）○伊邪那岐神と云ふひ。事依賜矣と云までは。出雲風土記ふ採れるふを。既ふ徴ふ云ふがおを。○麻奈子坐熊野加武呂命は。下ふ引く。出雲国造神賀詞ふも。伊射那伎乃日眞名子。云くとあり。須佐之男大神の。出雲国熊野社ふ留給ふる御霊を申せひ。麻奈子も。縣居翁説ふ。万葉ゆ。父母爾吾者眞名子曽を云ふを。

愛子とも書とゐゞ。此れ言と同じ死を思ふば。眞名子た。愛みの殊ある義ゐて。眞之子を親み愛し む詞ゐ卍と言を死。方葉六、ゐ父公尓、吾者眞名子叙、妣刀自尓、吾者愛兒紋云く、十三、長哥ゐ母父尓、眞名子尓可有、六、云くゐど見も。熊野た風土記ゐ。意宇郡熊野山云く。熊野大神之社坐と見えて。上ゐ出とゐ。熊成峯と同ゐゐと彼處ゐ傳せゐゞ如し。第七十九段の傳見べし。ちて此社は神名式ゐ。意宇郡ゐ熊野坐神社名神大。とあ卍。風土記ゐ。熊野大社と舉て。在神祇官と云ふる是ゐゆ。国史ゐ。仁壽元年九月庚午朔。擢出雲国熊野杵築兩大神竝加、從三位。貞觀元年正月九七日。出雲国從三位熊野神正三位。同年五月九八日。授出雲国正三位勲七等熊野神從二位。同九年四月八日。出雲国從二位勲七等熊野神正二位ゐど見えと卍。かくて此社の。須佐之男大神ゐ坐こをた。国造神賀詞ゐ。出雲国乃青垣山内爾。下津石根爾宮柱太敷立氏、高天原ゐ千木高知坐須。伊射那伎乃日眞名子。加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命とゐの卍。師云。伊邪那岐命の御子は多ゐる中ゐも。天照大御神を。須佐之男命ハ。殊ゐ御愛子ゐ坐こと。上ゐ見えと卍。日は日子日女れ日ゐ同じ。加夫呂伎た神祖ゐ卍。大名持命の御祖ゐる故ゐ出雲国ゐては。殊ゐ如此申せゐゐ卍。櫛御氣野命と申けた。須佐之男命れ。熊野宮ゐ鎮座ゐ

御靈を稱奉れる御名あり。其例に同神賀詞に大名持命を、倭の大三輪に祭る御名と稱し、他にも有り。さて熊野社に祭る御名の別にある例あり。他の類にて同神も其社の今に說りは上宮三社に中伊邪那岐命、伊邪那美命、左早玉男、右事解男あり。下宮は天照大神、須佐之男命あり。と云ふまでも神名式に多く熊野坐神社とのみ有て、幾座を云こを無きに、官帳に入て式に載るに主をして祭る須佐之男命一座のみあり。其餘に添て祭る神にて官帳にハ入ざる神れ已。總て神名帳に例何まれ神社ふても幾座といふこと ふきに。みな一座を知べし。

式に熊野を同郡に久志美氣濃神社と云も別に有る故は。熊野大神を。まと別に祠まる故社なるべし。此御名を別に一神と心得むは非なり。さて舊事紀に此須佐之男命を坐熊野杵築神宮と云ふは例の妄說なり。まと祝詞考に熊野神社を穗日命の御子健三熊命と為らまして熊と云名に依て說れ說ふまで誤なり。さて叶ハ無事多し。伊射那岐乃日眞名子を云ひまと彼神賀詞のみならば文德實錄三代

實錄にも熊野ハ先杵築に後に揚げまと勲位も一等降れり。まさら彼健三熊命にて叶ふべきうに須佐之男命に坐ことに疑を有り。斯て櫛御氣野と申ば御名の解ふきもれあり。

を缺れとるゞ。櫛御氣は奇御木。野に主なるべし。木を氣と云ふ由に上第十四段一木とある処に注せり。

けて奇御木とは。楠杉檜木などを生して。外国を服に給ふべき設の浮寶まと瑞宮の材と爲給へる功德を。稱奉れる御名なるべし。風土記島根郡朝酌郷に処に熊野大神命とも申せ已。

○五百津鉏神鉏云く。五百津に數多を云言なる由に既に云に已。神鉏とは。齋鉏と云如く。齋ひ稱に名なる故名ゝ。徒に尊みて稱に故ふも有べし。所取くと は。櫛御氣野命に御親あるとに鉏を取くゝ。賜ふ狀な

ヒ。此ハ第七十六段ニ見ユル如ク、国作ノ業ヲ要トスル器アキバアリ。事依賜矣ハ。天地初發ル時ニ。天神ノ御命以テ。伊邪那岐。伊邪那美二柱神ニ。天瓊戈ヲ賜ヒテ。是漂ヒ流ル国ヲ修固メ成セト。言依シ給フ処ニ注セル如ク。事ヲ依任セテ。執行ハシムル義ニテ。事ノ趣モ彼処ト全同ジ。抑須佐之男大神ノ宗ハ躰ハシモ。既ク豫美都国ニ入坐レド。本ヨリ此国土ハ。御父伊邪那岐大神ノ御依シ坐ル御命ヲ畏ミ。作堅メ給ハデハエ有マジキ謂ヒアル故ニ。今根国ニ入給フ際マデモ。御子神等ヲ見立テ。国作ラシメ給ヘルガ。永ク彼国ノ大神ト為ル給ヒ。ハ。猶ホ此国ニ留ル給フ。御霊神ハ。カク大名牟遅小名牟遅神ヨリ力ヲ加ヘテ。此器ヲ賜ヒ。国作ノ事ヲ依給ヘルモ。称美奉ルバキ辞モ絶テ。いとも畏く辱ク大御心ヲ有ル。けて本書風土記ハ。意宇郡出雲神戸郡家南西二里二十歩。伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命。五百津鉏神鉏所取ル而。与所造天下大穴持命。二所大神ニ。此大神等ニ依奉ル故云ヒ神戸ノ他郡等神戸且如之ト云フ。同記抄ニ。出雲神戸相当大草郷中神明之社辺也。天平以後合徙神戸大辰之社ト云フ。他郡等神戸且如之ト。秋鹿楯縫等ノ神戸モ。二所大神ニ奉ルトモ。皆同じとあり。文意ハ。熊野加武呂乃命ハ天下造ラシ大神ニ。五百津鉏ノ神鉏ヲ依シ与ヘ給フ御功アル依テ。此所ノ神戸ハ。此二所大神等ニ依奉られ。と云意ト通ヘト。委ク論ヘルヲ見ベシ。けて上ニ師れ引れし。熊野大社ト同郡ニ。久志美氣濃神社ハ。神名式ニ。山狭神社ノ下ニ。同社坐久志美氣濃神社トアリ。

山狹神社内に齋はれ給へるなり。山狹神社は風土記に夜麻佐社とて二社あり。抄に在山佐村に属能義郡而熊野村東南也と云へり。度會延經考證に此社の下に初天地本紀に伊謝那支命娶惠乃女命生大夜乃女命次足夜乃女命次若夜乃女命三神大夜乃女命熊野大御神后坐陸上立左肩忍奈豆流時成出來神名加古川比古命又右肩忍奈豆流時成出來神名熊野大御神加夫里支名久志彌居怒命自髻中成出來神名須佐乃乎命三柱云く熊野村宮柱太知奉云々后大夜女命山狹村宮柱太知奉而靜坐と有るを引るゝ。此書は今傳はらず延經も長寛勘文に見えたるを再引たるなり全文は第廿六段の徵に引ぬゆき釈日本紀八卷にも此を引る処あり此はいまく誤り紛たる傳と聞えて。

解難はきど山狹村宮は事に緣有げなきは吾も引れ但予が見たる本は山字を小と作とめそれ正しくは此に由なし後人よく考ずて定むべし はと神名式に紀伊国牟婁郡に熊野速玉神社大熊野坐神社名神大を兩社並びて在り。この兩社は共に国史に貞觀元年正月廿七日從五位下熊野早玉神熊野坐神並從五位上同年五月廿八日從五位上熊野早玉神熊野坐神從二位とあり扶桑略記に延喜七年十月二日授紀伊国正二位熊野早玉神從一位熊野坐神正二位をのるは中々おぼろなし 此は共に出雲国意宇郡なるを移祭れる社なるを論ひなし其は彼處にも熊野坐神社速玉神社同郡にのる風土記にも速玉社と舉たるを抄に在大草郷中熊野村熊野社同地と云へり紀伊国のは此を移せる故に熊野速玉神社と

は云ふ外ぴ。然る例いと多かめ。但し移せる時代は今知はらず。此国よは早く五十猛神並よ其妹神二柱も鎮座せバ。其御親ある故ふ熊野坐大神を移し。まと其社よ縁ある速玉社をも移せるうて。木国造の祖うの若くは熊野ともと国をも云しのむ熊野国造れ祖ふどの移せるふ。何よ移せふ世はいと上ぴてぞ有らむ。南紀名勝志よ。熊野村新宮庄ふ。上熊野村。中熊野村。下熊野村あぴ。今新宮村と云も。元は熊野村の内ふれぎも。新宮大神鎮座せ故ふ。所名をせるう。諸書ふ熊野村と云ふは此處ふ。ほ。ぎし。總て牟婁一郡を熊野と云は。新宮熊野村ふ因て云と見も。とのぴ。地名は熊野を云も。熊野大神を移せる故ふ。神の本居れ地名の移まるふぴ。此例も今数ふるよ暇あらぶ多のぴ。けて新宮とは。速玉神社を申せ

此は速玉之男神と申して。伊邪那岐大神。豫母都国ふ往坐し。伊邪那美大神の彼處よ坐ば。醜女き穢き御有状を御覽して。族離れむと詔ひ。唾給ふ時よ生坐る神ふて。此神と。豫母都事解之男神とは。御夫婦の御親れ絶る方よ就て生坐ふぴ。第十九段の傳見るべし。然るふ出雲は更ふぴ。此ゥも熊野大神よ屬て祭らき給ふ事ハ。須佐之男神は。伊邪那岐大神の御體ふ受知看せふ。伊邪那美大神の御親みれ。清く放ふ。驗よ因て。生坐る神ふまむ。此事ハ第二十九段れ傳よ委く注りき。御心と。御母れ坐ば根国ぴ。罷坐まく思欲して。其御情のふ。よ。此御世の神功已よ畢て。罷り給ふ。其事解れ

宮ある故に。添て祭らまを給ふよぞ有べき。其縁を探ねて云はゞ。事解之男神も。必共に祭られ給ゆべきふ。けもあきハ何ある由外らむ。或書にハ。此神も相殿に坐とし云ゆれど。式に二座と無きバ。推量れ説あらむも知きゞ。後世に此両社のあと。種くれ説あきど。總て論ふよも足らぬ説ども外ゆ。長寛勘文に。二條天皇の時に。數れ博士とちふ勅命せて。勘しめられとる文を。集とる書ある。本因に叶ゆる勘へ。一ッざに犯きゞ。只太政大臣殿の御説れみぞ。大この宗に叶ゆる。説ある。江談抄に。熊野三所本縁事れ問答の処ふ。熊野三所。伊勢大神宮御身云く。本宮并新宮。大神宮也。那智荒祭。又大神宮。救世観音。御変身云云。此事民部卿俊明所被談也云く。とある答を以ても。其世の人くれ。神祇の本縁を知ざる事を察べし。熊野三所とは。熊野坐神社を本宮と云ひ。速玉神社を新宮と云ひ。那智山權現宮と云を加へて。三所とは云あり。然れぞ那智は。式に載らきゞ。まと本宮新宮には祢宜祝あゆて。那智ふは僧れみ在とぞ。其祭神は。本社事解男神に。結宮と云へり。又本宮新宮の神等をも配祭り。まと十二

所宮と云ふも有りとぞ。凡てハ佛法風れる故に信ゞとしはと在田郡に。須佐神社。名神大月次新嘗。

伊ゆ。郷郡ある。まぞも。熊野坐神社と竝とふれ。由伊事ある。ぢし。清和天皇紀に。貞観元年正月廿七日。従五位下須佐神従五位上ぞあり。當国の神名帳に。従一位須佐大神とあり。和名抄に。當郡に須佐郷も見も。考證に在保田庄子田村南中山半腹と云へり。

近江国高嶋郡に熊野神社。越中国婦負郡に熊野神社。丹波国熊野郡熊野神社。清和天皇紀に。貞観十二年九月廿五位下と見も。丹後田辺府志と云物に。斎大明神と云れ。一日。授丹波国正六位上熊野神。従市場村の中に。神に事ある家あり。女子を生る時。神箭飛來りて。彼家れ棟に。ゑて。ゆ。四五歳のとき宮に送り奉る。山中に在れども。獣も傷ることあり。成長りて。交接の心生ぬる時。大蛇出て眼を嗔らゞ。其時郷に帰る。此を斎女と云。あれ斎女ある宮もあに。世人斎明神と云あり。と云り。

ふど有ゆ。此等も。熊野坐神社を移せふ社外るゝ。異神ふ

ふゝ知ら祢ど必。因ふ記し出ず。此外諸国ふ式ふも列らまど。熊野と称ふ大社の多ゝる必国史ゝめ見え給むざは御徳の優れとる故ふ依ふ也し。○於是と云ゝ卍。曰葦原国と云まで。大三輪神鎮座記ふ。初伊弉諾伊弉冉二神。共生大八洲国及處ゝ小嶋而地稚如水母浮漂之時。大己貴命與少彦名命。戮力一心殖生蔦葦固造国地。故號曰国造大己貴命因以稱曰葦原国。と云るを採れるふと。徴ふ云ふゞ如し。舊事紀ふも同趣の傳あり。合せ見べし。文意ハ。天地初發れ時ゝ。伊邪那岐伊邪那美二神して。大八嶋国を始必。嶋ゝをも生置給へまゞ。地稚く。水母ふ浮漂ひて在しゝば。大名牟遅少毘古那二神。御心を戮せて。葦蔦菅ゝを殖生し

ゝ。固造り給ふ卍。其葦れ生茂卍し故ふ。葦原国と云ゝ。ゝ卍。右ふ引く文ふ菅ゝ無れど。ふハ下ふ引く長哥ふ依て加へとるふ卍。葦れふゝは。初ふ出て。其處ゝ注ゝ。蔦ハ和名抄ふ。本草ニ云菰。亦作菰。一名蔣。和名古毛と云る物と同水草ふて。万葉を始必。多く古毛ふは。此字を書とめ。字鏡ゝれ。蔣蘭ふど れ字ふ。己毛と云り。菅も和名抄ふ。唐韻ニ云菅。或作蘭。草名也。和名須介と云卍。字鏡ふゝれ。茅蒹ふち ど。須介と訓り。ちて仁明天皇紀れ長歌ふ。日本乃野馬臺能国遠賀美侶伎能宿那毘古那加。葦菅遠殖生し津ゝ。国固米造介牟與理云ゝ必詠卍。ふの哥ゝ。師も国号考。葦原中国の処ふ引て。此事今傳ハまる書どもゝ見ざまど。如此詠るゝ。必それゝみ據ありゝむ。必云れしは。上ふ引る大三輪神社記を。師ゝ見らまざる故ふ。此等れ

古傳ふ思ひ合せて。熟くゝ此草どもは。浦渚を成し。干潟を作り有狀を察はふ。まだ水は流るの淀む所ふ。自然ふ淺瀨の出來て。其所ゝ自然ふ。蔦は一本生出るゞ始りて。殖茂るはゝ。ふ。其根ふ泥土の滯ひ。茂れる莖葉は年ゝゝ朽積りて。益ゝ淺くなる程ゝ。まゝ自然ふ葦菅の生出ふ。漸くゝ廣く。干潟とふはふ從ひて。右は草ども。渚は中所を去て。水際ふ生もて行く程ゝ。渚は益ゝ廣くふひ。斯て渚中の高所ゝは。右は水草生ずなひて。只それ根のみ遺れひ。其時ふ。早くも島の飛來て餌を求ひ。屎まる程ゝ。其屎をゆ。陸ゝ生る草木は生出て。遂ゝ渚濱とは成ふるけひ。ちて其遺れる根どもは。朽ふも其性を失はず。地の筋とふり。締ひと成て固まる。こと。譬へば。築土は寸莎は如き意ず。ふあり。己年ごろ斯る事ゝ心を用ひて。河辺を行ゞ。ては。右の草どもは有樣を見もて行ふ。岸は崩くゝり見まず。葦は根は太きは。腕ぢかりふるも有て。土ゝ深く根延ふこと。底岩根ゝ及ぶとも云ばく。万葉ゝ。芦の根は。ふも。ふろゞも云るゞ如し。蔦の根も太く長きゞ。其節ゝ。ふ。毛の如き細根ありて。土は。くゝ締り付ばひ物ふる。ふ。菅は根は万葉ゝ。湊のゞ中ふる王小菅。まゝ湖ゝ。核延ふ小菅ふど詠て。葦と交りて生ふ草ふる。ゞ菅根は根長ゝとも。岩本菅を根深めて。ゞも。菅根の乱とも。菅根は根毛ころゞも。石根疑しみ菅根とゆ係ゝる如く。凝しき細根の長く延て。末は丸き物の附ゝふくゝり。芽を出し。ゞ。殖廣ごりて。土の固ゝと成ばき物ゝて。殊ゝ木草の根ゝは。悉く鋏氣を吸ゝよせて有ゞ中ゝ。此三品は。殊ふ其根ゝ。鋏氣を多く持くゝせゝふは。元ゝ。ひ土は。ふはりゝと成べき物ふる故ゝと見えふひ。己秋田ゝ居ゝふる。ゞ。家ふる地は。三百年前まで。は沼ゝて有しを。所ゝ爲て。家を立並ゝる処ふ。菰根の多く出ふを。積置れるゞ。五尺ばゝり土を掘ふて。生ゝる事ふりき。まゝ近ゝころ。しのゞ。中ゝ芽を出して。

備前国ある門人小谷長秋が許をり其縁ある人の地より井を掘りしに一丈ばかり下より草の牙ぐみと出るが如しもの植とするに芽をふきて栄えと三百年ばかり前に海辺ある所しを今に二里許も遠そ紀ぬまと下総国香取郡鏑木村ある門人平山光春が語りしに我が辺にも少し高き処ありまど此より東方凡そ径二里ばの所は低く平らなる所ある所にて海上匝瑳香取の三郡より係きとる其を今椿新田と云ひまと俗に干潟とも云此にもと湖にして有りしが沼とあり蓮ある生とりしを去し寛文七未年近辺の者等れ願ひに依て同九年十月を以て開発普請はじまり同十一戌年功畢て新田と成きと云ふ其ほの為り何処とあく草蔦菅あどの根に活るが如きも多く出まと蓮実をり芽を出しも有ふり斯て地下四五尺も掘きば何処も蛎がら蛤がら出れど夥しく出るを見きば往古は海ありしあと疑ふし今に海濱まで二三里も隔とき寛文年中より今百五十年餘ある迄しと云ひかく事ども思ふ多く銭を持て上る云る此草ども根に不第百三十一段天磐笛の下に注せ考へ見て辨べし

然まで二柱神に国造り固め給ふ此三品の草を国に端ふ殖生し給ふ事に深き由ほ神態ふて今現に右に言ふ如く此草ども自然に生出て国造る状ふ事に此の謂ふ依る事ふて人は自然の如く思ふども実は幽を此此二神に御霊を幸ひ給ふ賴る事ふらむと所念ふ。国を知む人ふどに広く此理を辨へて国祢て此二柱神を祭此三品の草をまだ生し立て地を固め然して国造れ功に成べき物にこそ。ちて此草ども二神して殖生し給へ此は有まど専とに少毘古那神の生し給ひ上に挙る仁明天皇紀の哥に此一神に係て云へるにも思ふべし此神決めて宇麻志葦牙比古遅神ふべく思ふ由ほ此ち

ゐた此葦ちふ草はしも。天地初發の時ゐ成出し。彼一物ゐ、はゐ生出し物ゐる由た。彼處ゐ既ゐ云へる如くゐるゞ。

第二段葦牙の下。第六段葦船ゐ下ゐ傳見るべし。其葦牙ゐ如く萌騰れゐ物ゐ因て成坐る。宇麻志葦牙比古遲神た。彼處ゐ云如く。皇産靈大神ゐ産靈ゐ。因て成坐る神の始ゐて。是より前ゐ。天御中主神。高皇産靈神皇産靈神の御名た出とまと。此三神た。始ゐく終れく。天地未生ざゐし前ゐり。在坐る神等ゐて此神さちの産靈ゐ因てぞ。比古遲神ゐ。次くれ神等れ生出ませるゐと既ゐ始ゐ委く注へりき。葦牙と御名ゐ負坐ゐを思ふゐも。甚少さゐゐ聞えて。只れ譬語ゐは思れゐ。元ゐ葦ゐ由ゐる神と察ゐゐゐ就て。深く思ゐば。彼神たしも。皇産靈神の御靈ゐ依て。生坐る神の長ゐゐゐ。前段ゐ採れゐ傳ゐ。少毘古那神を。産巣日神ゐ長子ゐ有ゐ思ひ合さゐ。葦ゐ因て生坐るゐ。少毘古那神の。葦牙生して。国造堅ゐ給ゐる傳ゐ思ひ合ちゐ。少毘古那神を。産巣日神の御手俣ゐ。漏落ゐと。詔ゐるを思ゐゐ。元是天神ゐる事れどをも思ひ合ゐゐゐ。此た疑ゐく同神と通えゐと。但しかく言はゐ。彼葦牙比古遲神の段ゐ。獨神成坐て。彼神た。天下ゐ降坐さゐ。神と聞ゐるを如何ゐゐど云も有ゐ。ゐまゐど。彼処た多ゐ成坐る因を語ゐ傳ゐ。さる耳ゐて。事蹟の傳ゐく。後ゐ御名の替りて事蹟の有る故ゐ。彼た彼。此た此と別ゐ思ゐ。古傳れゐ。ゐゐ所ゐり。例ゐ云はゐ。彼比古遲神れ次ゐ成坐る。天ゐ底立神も。獨神成坐而隱御身矣。とゐるを思ひ寄せて考れゐ。姓氏錄を始ゐ。他の書どめゐ依て。此神も天降坐るゐや。と思れゐ。其御末の氏くいと多くて。此神を合せ考ふべし。凡て古

事記・書紀の傳、なれみ傳、と思ひ、文面よれみ依て、神世を思ひむ人も、己ゞ今論ふゝぎりゐ非ず。然きで此神も彼一物よま拔生出さゐも葦牙の如きもの其芽も萌出る狀ゐ。萌騰きる物ゐの已。其物ゐ因て成坐して。おの萌上れる物も。即天日れ御國と成きること。既ゐ委く云るを見べし。始め天御國ゐ坐々むゞ。御祖命の御教養ゐ順はず。御手俣ゐ已漏墮て。此中國ゐも降坐ぢ。外國ゐ放往坐しゞ。前ゐ海ゐ依來坐るゐは。外國を已渡來坐るゐ已けど。師もゝ拔〳〵此由をむ說れさりき。かくて元ゐ。葦ゐ由あゐ神ゐ坐せむ。神皇產靈御祖命も其をしも所思看坐して。大名牟遲神の。國造る功を祐し給ふるゐぞ有々ゐ。阿那ゐふと。阿那可畏。○水母も。和名抄ゐ。崔禹錫食經云。海月一名水母。貌似月在海中故以名之。和名久良介。とあるゐ依て訓ぢし。師も云れさゐ如く。此物海中を浮漂ひ行く物ゐ。其形書晴さゐ天ゝ月も白く見もゐ。ゐ甚くく似て。信ゐ海月と名け拔べき狀しさる物ゐ已。其國地の浮漂ふ狀を。彼物も如くと譬へさゐ已。さて此語古事記ゐも。天地初發の處ゐ。國稚如浮脂而。久羅下那洲多陀用幣琉之時。とあり。去れ詞ともの義も。第二段の傳ゐ注へるを見るべし。○鋏亂云。久羅下と云言義も。古史本辭經ゐ委く說れさり。就て見べし。○浮漂ハ。宇伎多陀用布。と訓むも惡ゝら祢ど。神代紀の初ゐ。洲壤浮漂譬猶游魚之水上也とあゐ。浮漂字を古本ゐ。宇伎多由多布と訓れど。其訓を取拔。常の本ゐも。ウカレタヾヨヘルと訓已。万葉

二よ。大船之泊流登麻里能絶多日二云〻。はと夕星之彼往此去大船也。猶豫不定見者。云〻。此者大船の水よ浮びて。由〻良〻と動く狀を云るゐれバ。古本ゐ。漂字を訓る也能當ま已。多由多布。多〻用布。もとハ決免て同語ゐゐ[illegible]し。ゐゐ万葉七巻ゐ吾情湯谷絶谷浮蓁辺毛奥毛依勝益士。とも詠るよて。詞意をく聞えとり。ちて浮漂也国地ぞた。大地全の謂ゐを非ゑ。天地初発の処よ。是漂在国とある也、大地全を云るゐまど。彼とは異ゐり。思ひ混ふぼうらば。伊邪那岐伊邪那美二神御合坐て。次〻生給へる国也八十国。嶋の八十嶋を云ゐ已。抑、ゐれ大地也始はしも。皇産靈大神とちれ御靈よ依て。かの其狀言ひ難き一ツ物成出とる。其質た泥と淳の混沌

のれとる物ゐゐゐ。其中ゐ含有已し牙ちふ物た。卽萌騰已て天日と成とる後よ。其一ツ物よ。伊邪那岐伊邪那美二柱神成坐ゐゐ。彼天津神の御靈として。天瓊戈を言依し給ひ。二柱神まゐ其御戈以て。青海原を搔成し給ひ。遂よ其を衝立て。国中也御柱と爲給ゐれた。泥は御戈ゐ締已憑て。淳た其外を包免る如く成免る時了。大八嶋国を始免。嶋〻をも。次〻よ生給ゐゐ。ゐゐ委くた。第二段より。第九段まで。ゐ注せるを見て。其趣を辨べし。其た淳上ゐ生給ゐる故よ。漸〻よ大よは成行ども。元〻已淳よ浮て在れた。漂ひて壞ゐ〻事も有り。む故よ。今かく葦菅ゐぞを殖生し。造固給ゐる免已けゐ。彼国

引の故事も更れり。彼処は注せる今現はも浮田流田あど云ゞ有るを作ひ固免て田地とあゝ状をも思ひ合せを。大小き違こそあき理も同じ趣れりのし。まと地震あど。して。国地の没て海とあり。或も海の陸地と替れる事れども。ひ〳〵有る事れひ。又かしあも沈没斯て山も。其。みて。此は新島も出來し事も。あきは非ず。

鎮と成れる事と所念ひ。そは万葉三巻。山部赤人ゞ富士山を詠ふ歌ふ。日本の山跡国も鎮とも座ゝ祇のも。寶ゞも成きる山のもと詠るも。山も国土も鎮てふ古説あひしを。心は含みて詠るはやと聞ひきも。れひ。○因曰葦原国おも上の如く。葦を植生し給ふ故は。四方も海邊も。悉くふ葦原あひしゞば。如此も稱ふる由あひ。れゐ末は葦原中国とある處ふ注もむ。第百六段の傳見るべし。○爾時と云を

ひ以下も。出雲風土記は。飯石郡多禰郷。屬郡家。所造天下大神大穴持命。與須久奈比古命。巡行天下時。稻種墮此處故曰種。神亀三年改字多祢と。ひのるを採きひ。此郷名和名抄はも出とり。風土記抄ふ多祢郷。縣谷村。中今曰郡。処也。併縣谷。多祢。松笠。坂本。乙多田。加食田。掛谷。宮内。吉田。以為一郷と云へひ。天上よひ降墮とめと通ひ。抑此国は稻植るおゞも。前は須佐之男大神の。大須佐田。小須佐田を作給ふる後ふも。大年神あど次〳〵ふ。田作る業を教給ふれど。稻種もいと多有ふきは。今別は降賜へふ事も。後は皇美麻命の天降坐ゝ時ふ。天照大御神も。別は齋庭も穂を賜へるを思ふは。此も然る別ある種を降し給ふはもも有ふはし。赤縣ふも。神農と云ゞる

王代世ヨ。天より粟を降し
とりと云こと。彼国籍ヨ見
えあり。粟とも粃をいふ。
此ヨ稲種をあるヨ同じ。

爾大名牟遲神。遠延而伏出時。
コヽニオホナムヂノカミヲエテコヤレヽトキニ

少毘古那神。欲活出而。以大分
スクナビコナノカミオモホレイカサマクテヲオホキダ

速見湯。自下樋持度來而。漬浴
ハヤミノユヨリシタビモチワタリキテミソヽギレ

則。有蹔間而。活起居然。詠曰眞
カバアリシマシホドテイキタチマシテノリタマロマ

蹔寢哉而。踐健出跡處。於今存
シバシイヌルカモトテフミタケビシアトドコロニイマアリ

湯中出石上。伊豫國出溫泉是
ユノナカノイハノヘニイヨノクニノイデユコレ

也。仍憫人草出病。二柱神相議
ナリカレアハレミヒトクサノヤマヒヲフタバシラノカミアヒハカリ

而。始製藥湯泉術矣。伊津神湯
テハジメタマヒクスリユノミチヲキイヅノカミノユ

又其數而。箱根出元湯是也。
モソノカズニテハコネノモトユコレナリ

此段爾と云へり。温泉是也と云までは。伊豫國風土記を採て記せるなり。既に徵に云へり。此れ古風土記なり。全書傳ならば釈紀に引とるを採れるなり。○遠延而伏之時に。本に見悔恥而とあるを。かく書る由に。既に徵に云るを見べし。書紀に。瘁まと瘼臥なりて。毒氣に中りて病を云へり。委くは神武天皇卷に伏を許夜須と訓む由に。上に注せる師説を見べし。伏を許夜須と訓む由に。上に云へり。第十一段の傳見るべし。國造堅米むと。山川幽谷をも嫌ふこと。あく。巡給ひ々む故に。荒振神。邪物などに吐れむ氣吹に。毒されに給へるなるべし。神武天皇卷に。天皇熊野村に廻幸せるに。大熊出て毒氣を吐て失とるに。天皇倏忽に遠延るし。御軍も皆遠延て伏せる事見え。景行天皇卷に。信濃坂を度る者。多く神氣に中りて瘼臥せること。まと彼此に惡神の。毒氣を放て。路人を苦しとる事。ほと仁德天皇卷に。被毒蛇而多死に。あど有を思ひ合せば。倭建命の伊夫伎山神に惑さを賜ひしも。同類の事あり。れを其所々に注ふを見るべし。○大分速見に。景行天皇紀十二年に處に。天皇幸筑紫。十月到碩田國。其地形廣大亦麗因名碩田也。碩田此云於保岐陀。到速見邑。有女人曰速津媛。爲一處之長。其聞天皇車駕而自奉迎之。とあり。碩田を國と云ひ。速見を邑と云へるを思ふに。當昔は。速見に碩田國内あるのみと通ひ。後に豐後國の郡とあるのみて。彼國の風土記に。大分郡速見郡と出とり。和名抄も同じ。れも此二郡の事に。景行天皇

巻よ奉く云べし。ちて湯ち風土記よ。速見郡赤湯泉在郡西北。此湯泉
北穴。在郡西北竈門山。其周十五許丈。湯色赤而有涅。用足塗屋柱。涅流出外。變爲清水。指東下流。因曰赤湯泉とゐの已。
是ふるぢし。此風土記の箋釈と云物よ。湯今属石垣荘野田邑。其潤十餘丈。純赤如朱。下足便爛。能熟生物。時見赤魚游泳。然此湯近歳大衰。無舊日之觀。竈門山属門庄内竈門村。蓋及後世割郷置荘。始山与湯異其所属耳。湯今曰古市川。東流入海といへり。はと玖倍理湯井在郡西。此湯井在郡西河直山東岸。口徑丈餘。湯色黒涅常不流。人竊到井邊發聲大言驚鳴沸騰。一丈餘許。其氣熾熱不可向昵。縁邊草木悉皆枯萎。因曰慍湯井。俗語曰玖倍理湯井。と云る井もゐの已。箋釈
ふ。此湯井今属石垣荘鐵輪村。其山多生硫黄土脈甚熱。処処有溫湯。所謂湯井小池也。濶二丈餘。深丈餘。旁有小洞。溫

泉出焉。盈枯自有定候。將盈則霹靂鳴動。熱湯奮発。炎気特甚。土俗呼曰鬼山地獄。河直山鐵輪山也。久倍理者燒之俗言猶言火尓久倍留也。と云ふり。はと大分郡ふ酒水在郡西。此水之源出郡西柏野之磐中。指南下流。其色如酒。水味少酸。焉用療痂癬謂盻太気。と云る水もあ已。箋釈郷南行入堂尻川。療痂癬者。案郡西与速見郡接壤。故受鶴見硫礬気脈。伏行地中。発于此。故然已と云へり。博物志よ。凡水源有石琉黄。其泉則溫。とも見也。
ちかれど此地をゆ出る湯を。伊豫国まで下樋を通して流し給ふる歟。持渡來坐已ゆは語傳へとる外らむ。下樋とは地中を通し給ふを云ふまじ。謂ひる地脈の事を云れるべし。
今れ印本よ。持度來以宿奈毘古奈命而。とゐる以字は衍ふ已。今れ一寫本ふふ紀よ依て文を成せゆ。事狀を思ふ

ふも決定て大名牟遅神は瘁坐る歟少毘古那神の治し給ふべき事ありけり。○漬浴則ち。本より浴漬者とある。漬ち誤あり。万葉緯より引とるより依て改め故。意を取て。美曾ゝ岐志加婆と訓ばし。體濯ぎ義外り。○有蹔間ハ。本より蹔間有志麻斯富杼有氏と有りき。訓べし。

○活起居然ち。意を得て。活起麻志氏を訓べし。前文より欲活之と有る結あり。○眞蹔寢哉ハ。麻志婆斯伊奴琉加毛と訓ばし。神武天皇卷より。天皇は惡神の氣より遠延坐る時より。寤起詔長寢乎。と有る處は師説ふは惡神は氣ふ瘁坐るおとをば。御自所思賜ふで。唯何と思く長眠し故と所思看て。如此ち詔へはあり。と言ふとは。此も全同じ趣あり。○詠曰ち。

能理多麻比を訓ばし。唯の御言とたいさゝ異よして。詠給ふる意なはは故より。此字を書りを見も。○踐健ち。天照大御神の御稜威は處ふも出と。第三十二段の傳見べし。○跡處。二字ふて阿登とも訓ばれど。外は阿登ゝ許呂と訓ばし。光明皇后は。佛足石の御哥より。弥蘇知阿麻利布多都乃加多知夜蘇久佐等胃太礼□比止乃布美志阿止ゝ己呂麻礼尓母阿留可毛とあり。○於今云ゝは。今と此風土記を記せる時を云。おは延長より奏進れる記ろを見もまば。當昔ふは其跡有しと聞えとり。今はいのより有む尋ぬべし。○溫泉ち。和名抄ふ。溫泉一云湯泉。和名由と有のまど。伊傳由と訓ばし。泉ハ出水は義ふるより對ふて。出湯の義ふり。あゞより由と訓をりち。語の調もよろし。

哥よむ出湯と詠れらへり。儲まと和名抄よ。伊豫国温泉郡あり。訓よむ此も湯と云のり。風土記にむ湯郡と作き。此の本文よ採れる事の連よ。凡湯之貴奇不神世時耳。於今世深疹痾萬生爲除病存身要藥也。天皇等於湯幸行降坐五度也。以大帯日子天皇與大后八坂入姫命二軀爲一度也。景行天皇紀よ。此幸行のあと記し漏されと。以帯中日子天皇與大后息長帯姫命二軀爲一度也。仲哀天皇紀よ此事見えば。二年と云年れ三月南国を巡狩し給へる事あり。其時あぞの事よや。然れど皇后を留給へる事を。委く記せれど。今要とあき事あ故よ切ゑ於。さて此事も推古天皇紀よ見えば。以岡本天皇並皇后二軀爲一度云〻。此れ云〻ゑ切メとるれ臣木比米島あどれ事よて。此よ要と

あき事あれむ畧きて。舒明天皇巻十二年十二月の処よ。此御幸れ事出きバ。彼よ記べし。以後岡本天皇。近江大津宮御宇天皇。淨見原宮御宇天皇三軀爲一度。此謂幸行五度也とのり。齋明天皇紀ふ七年正月御船泊于伊豫熟田津石湯行宮とのる時の事れ。往昔かく天皇命とちれ幸行ありしを思ふよ。甚く驗有し温泉ゑ聞えあり。あふ風土記よ挙とる天皇命とちの御〻世〻よ注を見べし。けて神名式よ。此郡よ湯神社あり。祭神れ大己貴命。少彦名命あり。と或書どもふ云ふり。宴然るばし。今も松嶺の道後と云処よ温泉ありて。諸人浴に。温泉の上ある小社。ゑれれち湯神社あり。と国人れ説あり。○仍と云より以下は。伊豆国風土記よ。稽温泉玄古天孫未降也。大己貴尊。與少彦名命。我秋津洲。憫民。夭折。始製藥湯泉之

術伊津神湯又其數而箱根之元湯是也走湯者不然養老年中開基非尋常出湯一晝夕二度山岸屈中火焰隆發而出溫泉甚烈鈍沸湯以樋盛湯浸身者諸病悉治とあるは是也以上を採れ卍走湯云々ハ也と大字は書連されど文の横あれぞ今は姑く小字は記し故此文の義末は云ふべし

ちて成文は舉とる文は義は二柱神民は病を憫みて諸国處々ふ溫泉を數所出し給ふ伊豆国の神湯と云も其數は此は箱根は元湯ぞと云る外卍伊豆をいふ国号は義ハ應神天皇卷は注ばし神湯とは神の始給ふる意は元なりは其湯は神々ふき義あるばし右は舉とは風土記の文ふ非尋常出湯云々と云へる趣をも思ふばし

ちて伊豆国は溫泉は多ふる国あれは何の溫泉

れおとれらむと国人は逢ごをは如此言ひ傳ふる湯あ卍やを探ぬるは今は此名を知れる人稀あるゞ熱海の溫泉を舊く然も云ふふをし古老の物語れ卍と云人あ卍是ふ依て此国の事記せふ書どもを集免て見るは卍於熱海と云地は東北は極は走湯山は近く今は町屋も多く立並とるゞ溫泉の源は町をり西北ふ在て淳の滿干ふ從ひ晝夜は六度ぞか卍沸騰こと甚烈く鹽辛兎こと淳は異あらぐ其湯源の上は湯宮を云社あ卍町家ある湯は此湯源を卍竹樋を通して引來るとぞ林羅山先生の丙辰紀行は也走湯より一里ぞり西ふ溫湯あり其名を熱海と名於れて人の万は病あるもの浴去れむ驗あ

り。先年余も人に誘はれて。湯に入て浴し。其湯ところを見るに。淖の進退ふとりて。岩の間をとり。煙むし上りて。人の近づくもあらぬわど熱き。熱湯涌出て流れ走るを覓をうけて家くに。よぎり。槽に湛へて人々を入れ。と記されとり。

上ふ引とる風土記。説ふとく符牙り。湯宮を云は。此れ二柱神ふほこと言まくも更れ。

熱海温湯記と云物を見まバ。熱海の温泉は。往昔この海中に。温湯俄に涌出とり。是に依て。彼辺れ魚類忽に爛死て。磯ふうち揚ること山の如し。人更に海中ふ温湯ある事を知らぐ。爰ふ万巻上人と云沙門あり。とはゝ此所に來れるが。海に温泉ふるべしとて。海人を入きて尋させれふり。果して温泉ありしうぐ。薬師の冥慮を仰ぎ。此温泉を里に祈てせて。諸人れ為に功徳せむとて。一七日祈けるふ。忽ふ温泉山下に涌出とり。里人奇み思ひれるに。薬師如來。里人の夢ふ告て。病ある者。この温泉に浴ゑべしと一洞ふ告く。里人一致して。即社を草創して。温湯守護神を崇ゑ奉る。今れ湯前権現是ふりとて。委く此湯の功能をも記せり。功能れ然る言ふれぞ。上件の趣れ。二柱神れ。此所に湯を出し給ひけむ古傳の遺れるに。例の佛風れ説どもを打交へて。妄説せる物と見えとり。二柱神を薬師を申せること。更に珍らしうぐ。ちて箱根れ。桓武天皇紀には。筥荷とも有て。相模と駿河との堺ふるが。相模ふ屬る足柄山の嶺續にて。万葉に。足柄乃筥根飛超行鶴乃云く。まと安思我良能波姑禰乃夜麻爾云くれど。足柄れと詠ふれぞ。古を巳相模国ふ屬と巳。ふ本足柄筥根のこをは。景行天皇巻に委く注ふべし。箱根に元湯是也とは。箱根に蘆湯。木賀。底倉。宮城野。湯本を始め。數所にふる湯の元れ。伊豆国れ神湯ふりと云る義と通も。然れど其間ハ隔とまど。大分速見れ湯を下樋をり。伊豫国ふ渡し坐るに準て思へど。此も地下にれ。幾筋も下樋を通し

て。神湯を渡し給へはあるゆ。斯て此嶺ゆ。式外あるゆ大社あゆ。祭神を書等ゆ。天忍穂耳尊とも。彦火瓊〻杵尊とも。彦火〻出見尊とも有まゝど。此国邊ゆ。右の天皇命神とち此。齋はれ給ふゆき由あゝし。此由は古学ゆ明あら む人は自ゆ辨へれむ。然れど決免て此段あゆ。二柱神を祭まゆる社あはべし。神名式考證ゆ田方郡楊原神社を今曰伊豆權現云〻とあり。此は何ゆ依て云るゆ。能く考ふべし。さて筥根山縁起といふ物ゆ相州西富郡足柄有勝絶仙窟孝昭天皇蓋代之始聖占仙人漸排駒形扉而爲神仙宮岳左有並肩巓長生妙術之霊薬篭之祿山者異其名而同其跡元正天皇養老年中洛邑有沙弥称万巻上人巡行諸州霊嵐祿山練行一夕有霊夢三輩各告云我等斯山之舊主也万巻夢醒矣霊瑞遠達天聡卽勅願造梵宮奉崇三容於一社号箱根三所權現主賓有五尊駒形能善左之右之昔日有神仙閲彼霊地而栽谷神妙薬自尓此來奇花異草谷良医雖有其證人以未識耳岳

是駒形應化之權扉也又能善者自熊野山詣彼山挽而留之駒形恣神力令蒙験徳傾医王宝瓶而與如意良薬矣能善現威光助其力矣とあるゆ。医事ゆ由緒ゆるを思ふべし。但し此縁起は建久二年ゆ南都興福寺の信救と云る僧の書る物ゆて例の佛風を附會とるいと長き説あれど今は古傳ゆ本ゆきて書るゆらむと思ふ限の此ゆ要ゆる処れみを甚く切免て引出あるゆり。万巻ゆ去と神社考まゝ詳節ゆは。滿月とゆり。熱海湯をも此僧は開とゆゆと云ひ。まゝ箱根縁起ゆ。天平勝宝元年詣常刄鹿島霊社建神宮寺と見え。此事鹿島社例傳記ゆも委く見ゆれゆ。東国を巡行ゆ〻人を惑はし。処〻は霊山霊社を。佛法風ゆ引ゆ免て。種〻妄説を作ゆ遺せる妖僧ゆぞゆり。

けて上ゆ引ゆる伊豆風土記ゆ。走湯者不然養老年中開基とゆゆは。箱根山ゆる湯ども。伊豆国の神湯を元湯ゆして。此の二柱神は始給ゆ。走湯は。此二神は始給へはゆ湯ゆは非免。元正天皇は養老年中ゆ開基と

ゆ湯ぞと云る所。行嚢抄に、舊記云、仁明天皇承和二年、豆州温泉出、謂之走湯と云れど、其舊記の名も知られ難、然まむ風土記に、養老年中に、万卷上人が開ける湯を、彼僧が開ける熱海の湯も、彼山は縁起に見え、熱海の湯も、彼山は縁起に見え、箱根の湯をも、養老年中に云る由なまば、此も彼が開ける湯なるべし。其は伊豆山とも、走湯山とも云、山にて、熱海は北に當りて、共に伊豆国加茂郡なり。箱根は北に南は山なるが、海うさし出て、山中に湯あり。謂ゆる走湯是なり。此山に坐し神を、走湯神と申し。鎌倉右大臣の哥に、伊豆は国山は南は北、走湯の神をたむべも云ならし、早きは神のゆゑしあり、ばあり北、和哥なれみの中に向ひて出る湯は、伊豆の御山とむばも云ならり、羅山先生の丙辰紀行に、走湯山とは、伊豆山は、とに侍る、此ふ坐まし神なば、走湯權現と申し、むらし鎌倉右大將、伊豆箱根を信じ、常ふ蘋蘩の礼を、いなし給ふ、二所参詣といふは此あり、此所に出湯あり、石走る滝の如し、走湯の名も、温湯にとてのゆゑとあり、伊豆山縁起といふ物に、本宮は、天忍穂耳尊にて、相殿は左右に天、兒屋命、天太玉命を祭る、此高根は、高天原と、始めて天降坐る地なり、當山に所傳如此、神社考、諸社一覽等之諸書所記、謬誤頗多矣、孝昭天皇四十二年に、彦火瓊々杵尊、湯泉の中より光を放ちて顯れ給ひ、花香初木姫に託し給ふ、縁起六卷に記しる神祕とし、ぞ有り、古傳の存れる物と見えと、但しは全書の、此に要と、せり、抑これ縁起は、近き頃記せ、と見るが、大概は古縁起に拠さまど、まく、彼と異なる所くを撫ひ切めて記、古縁起とは、走湯山縁起ぞ云書にて、元本は六卷なるが、世に傳はるは五卷まであり、群書類從にも收とり、弘仁延喜の頃より、次々に記せるとし、奥書ありて古書なれ、ど、佛風なる妄説多くて、大概は信らき無書なり、其は

於應神天皇の二年四月よ。相模国唐濱といふ地よ。径三尺餘ある圓き霊鏡現れきて。光を放ち或れ高峯り飛登り。或れ海中よ入る。仁德天皇の二十七年八月ふ。此霊鏡光明を放ちて。禁闕を照せり。勅使を遣して尋ね求し給ふば。勅使老巫を雇ひて。神託を請ゝるよ。吾。是異域神人也。昔西天之月蓋依釈迦文佛之勅奉鑄如來眞像。吾胤尊重此金像故下自高天原住月氏之境爰如來化縁已盡催東漸之幸我隨此亦東向棲宿三韓国爰神后討三韓之時誘云自今以後神達于本朝所仮依之金像可迎我朝我聞神后誘承諾出本国降臨倭朝と神託あり。ゝる由見えと。此れあゝよ要ある所のみを引切処て記せるゞ。此説れ後よ。欽明天皇の御世よ。百済国とり。佛像を渡せふ事を附會せて。其佛像を爭重れる故ふ。高天原より天竺国より渡れる故よ。ふと韓国より渡れ棲るゝど。神功皇后韓を討て。我を本朝ふ誘ひ。我ゞ爭ぶ仏像を。我朝よ迎ふべしと約きふ故ふ降臨せりと。仏像の渡ざふ先ふかく神託有しを妄説なる作れ。餘さ所ふ異域神人ありと云ふあゞ。凡て仏好せる中世人の。此国れ神を。皆本れ仏国の物よせむと云ふ例の妄事れり。されど自高天原と云るれ。然云ゞふ此処れ神れ。天忍穂耳尊よ

て。高天原とり降坐り。と云傳の有る故よ。其故事をも少ゝとり入れて。かくれ作れる物と見えさり。斯て世よ傳れる。一と巳五巻まをよ。天忍穂耳尊云るおとれ。一所もあし。六巻れ殊ふ祕して。山外よ出さ然由ふるは。然る古傳をも記し傳ふさる故ふ。其をふ処隠れ云むめ知ばゝらば。上よ挙ある伊豆山縁起ふ。六巻よ記して神祕と云云る城も思ひ合はべし。然ふは天忍穂耳尊れ。此嶺ふ天降坐

巳と云おと。古書よ見え云。此れ高天原ふ神留坐れ神ふ

ふよ。かゝふ傳の有おとを不審み思ふも有ばゝきど。此

れ天照大御神れ。日嗣れ御子よ御坐して。大御神の詔命

ふ依て。此国を治看さむ。天降坐るゞ。国れ状を臨睨ま

しゝ。甚く喧ゞる国ふ巳と詔ひて。還上はして。其由を白

ふ。国平竟て後よ。其御子彦火瓊ゝ杵尊を降し給へ巳。百六

段々り次々の傳を見て知べし。然れども此国形臨睨ませる時は。此嶺小天降坐る事此石の巳て。其傳の遺きるふやせ所念ゆる巳。正しき古書は見ぢる事を。傍れ書は記し傳へ。或れふも。信は正しき説ていの程もあり。はと彦火瓊々杵尊れ。湯泉の中を巳。顯はき給ふ巳と云れ。信ゲ多紀説ふきど。伊豆風土記ふ。日金嶽祭瓊々杵尊荒御魂云々。此云くれ。奥野神猟年々納狩具行装之次第。有図記。推古天皇御宇。伊豆甲斐両国之間。聖徳太子御領多。自此猟鞍停止。八枚別所往古猟鞍之司祭神号幣坐神坐。其舊法断久也。夏野猟鞍者。伊藤奥野。毎年撰鹿柵射手。とのるを切免とるあり。此は然しも要あれ。ぞ有れど。此神も。此所は由有れむとは知られむれり。と巳。日金嶽は。走湯山と嶺おく。きて。舊名れ久地良山と

云ふるとし。走湯山縁起ふ見えと巳。但し此嶺は就ても。種々云る説とも有れど。総て信ぢのと紀説ふきど記さば。神社考詳節。走湯の所は。俗説伊豆権現者。彦火瓊々杵尊也とあるれ。日金神と走湯神と混は誤きるれり。伊豆山縁起は也。互は混ひとる説ぞも有り。まさ北條盛衰記は也。彦火瓊々杵尊を。やゲて走湯神と云て。高麗国は。相模国那賀郡の山中は降り給ふる故は。其所を高麗寺といひて。趾を残せり。と云るは。箱根山縁起ふ神功皇后討三韓後。有武内大臣。奏云奏請異朝大神而令新願天下長安寧矣。即奉迁百済国明神日州奉迁新羅明神于江州奉移高麗大神和光寺。と云る妄説を。再傳へ誤れる説。州大磯聳峯因名高麗寺。と云る妄説を。再傳へ誤れる説。あり。まさ藻塩草と云哥書は。日本紀竟宴哥は。藤原博文の王辰爾を得て。世中ふ君無巳せず。鳥羽ふかれる言葉むふれ消れまし。と詠る哥を挙て。敏達天皇の御時異国をり。鳥羽は云人。飜ふて蒸しを渡せる。読む人無りれ。王辰尓と云人。飜ふて蒸しを渡せる。読む人無りれ。御門国を望み申せを仰せれ絹は写しと巳て読とり。下されれ巳。今の伊豆権現是ふ。伊豆国を望みて。下されれ巳。今の伊豆権現是ふ。伊豆国を望み皇紀元年五月れ処は見とる事れ有り。此は敏達天皇紀元年五月れ処は見とる事れ有り。此は敏達天高麗国を巳上れ

る表あり。然れど国を望み申せと詔ひて。伊豆国を賜へりとて見え。此も古縁起よ。高麗国雲光王。献烏羽之文。儒者不明了。以宣使。祈権現。権現変人躰。兮読之。といふ妄説を。まと誤り傳へとる説あるべし。應神天皇紀五年十月の下よ。科伊豆国令造船長十丈。船既成之。試浮于海。便軽泛疾行如馳。故名其船曰枯野。と有を。伊豆風土記よ引て。此舟木者。日金山麓。奥野之楠也。是本朝造大船始也。と見え。和名抄よ。田方郡よ狩野。庄を見え。此え。延喜式よ。軽野をある処ふて。東鑑ふ狩野。庄を見え。此を伊豆志ふ。枯野の船木も出とる処ありと云ひ。欽明天皇紀よ。十四年七月も処ふ。以王辰爾。為船長。因賜姓。為船史。今船連之先也。と而るあどを思ひとせて。種く考へとれど。此人の伊豆国よ由あるおとも。更ふ見えば。偖まと走湯山縁起ふ。當山も地主神も事を記おて。根元地主有二神。一者白道明神。其體男形也。二者早追權現。其體女形也。と云ひ。まと地主白道明神也。世人號來大明神。是也とも有も。いと古く此山を宇須波伎坐る神ありと聞も。然まど。來大明神といふ義代よ。天皇の道鏡を電幸ひ給ふことを。走湯神も怒りて。高麗国ふ移り給ふるを。地主神とり往て。誘ひ來れる故り。來明神と云ふ説も信らまば。但し早追神と云も。其御妻神ある由云るは。然も有ぢく思も侫く説外り。此神を伊豆山縁起ふ。地主白道明神も。五十猛神ありと。世人來宮明神と稱ひ。今熱海郷之鎮守是也。一曰木宮。又曰紀伊宮。乃素盞烏等御子也。を而る。是信の説あり。其も神名式ふ。加茂郡よ。杉桙別命神社と而る社も。今も田中村といふよ在て。此も五十猛神を祭れふ社ある。木宮大明神を申せと。然るは紀伊国よ坐ひ神外ふを。此国ふ移し奉れる故ふ。かく稱せと。ふも此社の事も。第六十七段の傳よ。委く注せるを見べし。然まば走湯も。もを此神も始給ひ

ゝむ故よ。上古とゆ此よ鎮坐しゝむゞ。後よ天忍穂耳命
れ。此嶺ゆ天降坐るゝと有しと云傳ゆ依て。走湯神を齋
ひ祭ゆ。まと養老年中よ。此の湯よ浴るゝとを始ゆるゝ
るぢし。是を以て風土記ゆ此山れ湯を大汝少彦名神よゝ係ざるゝゆり甚精しき傳ゆりゝゆ。
因ゆ湯泉のゝゆよ就て。此段れ二柱神を祭れる社を言
はゞ。まゆ攝津国有馬郡よも温泉ゆのゆて。上代の天皇と
ちも御幸あゆしゝと。国史ゆ數見えとゆ。神名式よ。此郡
ゆ湯泉神社。大月次新嘗。まと有間神社ゆどゆるは。共ゆ此二
柱神を祭れゆとぞ。湯泉神社のゝゆゝ。親長記よ。湯山明神。三輪明神ゆりと云。千載集よ。有馬れ湯よ。忍びて御幸有れる。湯れ明神をバ。三輪明神とゆむ申ゝと関て。ゆ。ゆらしく御幸を三輪の神ゆらず。ゝゆ

し有馬の出湯ゆるべし。と見ゆ。今も湯山町と云よ在て。
神界よ温泉ゆの。色葉字類抄よ。温泉三和社。舊記云。大神。
温泉。鹿舌也。崇神天皇御宇之時七年。始被定置神戸云々
ゆど見え。有間神社ゝ。熊野三輪。鹿舌の三座よて。鹿舌神
とゝ。少彦名命ゆり。今ハ香下村ゆる。鹿舌山といふよ在
て。鹿舌明神と申ゞと。諸書よ云ひ。摂津志ゆゝ。在中村。属
邑西尾。今称山王。近隣七村所祭。村民平日忌穢婦人産期
出就水涯分娩未嘗有産死者。といゆり。何れゝ是ゆるこ
とを知らゞ。

ゆと上野国群馬郡ゆ。伊加保神社。名神大。とあゆ社
れ祭神も。今は湯前大明神といゆども。少毘古那神ゆり
とぞ。一説ゆゝ。元湯彦友命。又名彦由支命と申ゞと。此社
れゆを記せる物よ見えとゆ。元湯彦友命。彦由支命とい
ふ神名。古書ゆ未見當らゞ。決ゆて少彦名命れ亦名ゆる
ぢく所念ゆ。此社のゆと。国史よ。承和元年九月辛未。以上野国群馬郡伊賀保社預名神。同六年六月甲

申奉授上野国無位御賀保神従五位下貞観五年十月七日上野国正六位上若伊賀保神従五位下同十一年十二月廿五日正五位下伊賀保神正五位上同十八年四月十日授正五位上伊賀保神従四位下元慶四年五月廿五日授伊賀保神従四位上同年十月十四日授正五位下伊賀保神正五位上あど見ゆ但し此十月十四日ある正五位た正四位の誤あるべし此所より謂ゆは伊加保の温泉なりまと此社ふ並びて椿名神社とある社た今榛名山といふ山より在て俗より満行宮大權現ゆ云此神も元湯彦命あゆと社説あり一説ふ中より伊特諾伊特冉等左右た国常立等大己貴命と云た信ゆとし或説より式ゆ椿字をゆけるた榛の誤ありゆ云るた然る説れり

ちて万葉十四巻上野歌ふ伊香保呂能蘇比乃波里波良と詠るゆ二首なり伊香保呂とた伊香保山あり呂は詞の助あり蘇比乃波里波良た傍の榛原あり榛名山の地名より由なりてはゆ

はと可美都氣努伊可保乃奴麻爾云くゆ詠るもなり此沼た伊加保山の半上より在て周三里許あはゆ沼れ三方ふ山ども立並び一方た開々ゆ野あり今は榛名の御手洗といふ仙覺抄ふ伊香保乃沼た請雨の使と扨所あり有ゆ今も此御手洗の水を借りて雨祈ゆ必祥ありとぞ

御手洗れ水を借るよ此山れ神奴より云へば神ふまをし竹筒より入れて取るを幾ばくど遠き所ありとも途より宿ること休らふこと叶はゆもし途ふ滞るゆ祀た其所ふ雨降て雨を乞ふ所より験あし故休まば帰りて雨を欲き地のゆぎ祀其竹筒を持廻りてまと本へ返ゆ然ゆをバ決ゆて雨降らばと云こと外しとぞあり此山を詠る哥万葉十四巻より数見え古今集長哥よも

いゆの沼れいゆ

ふして思ふ心を

云くあどあり

爾復二柱神。爲宇都志伎青人草及畜產則。定其療病方。又爲攘鳥獸昆虫災異則。定給其禁厭法矣。是以百姓至于今。咸蒙其恩賴而。皆有效驗。復此少

毘古那神者。作始酒出神也。故示謂久斯神。

宇都志伎青人草ハ。上ゐ出て既ゐ注ゐ。○畜產ハ。舊く氣毋能と訓るゑ依ばし。其ハ師說ゑ。和名抄ゐ。獸和名介毛乃。畜和名介太毛乃とあるは。相誤れるゑゆ。神代紀ゐ。畜產を氣毋能と訓み。獸を氣陀毋能と訓るぞ正し。紀。皇極天皇紀。天武天皇紀ゐどゐ。六畜を有をも。年久佐乃氣毋能と訓ひ。然れど畜ハ氣毋能。獸ハ氣陀毋能ゐゆ。後ゐら

源氏物語帚木巻に漢国のはべし犯気陀毋能とあるも、虎に乗て獣あり。古今集長哥に薬けがせる犬ぞもれくと詠るも、宗も雞犬あまども、雲に吠々むと詠れど、此哥に犬あり。然れば畜れがら、是も獣の方にとりてぞけども詠れむ。けて氣陀毋能も毛津物は意あるばし。古書に毛和物、毛麁物とも云ひ。氣毋能も。飼物の加比を切先て伎あるを氣と云へるれり。伎と気とも殊に親く毛物の意て常に通ふ音あり。

また石の屋じ。六畜は人は家に飼ひく物れまば。飼物と云あひ。然は氣陀毋能と氣毋能と似とる名あは故に。紛はし犯ぞかしと言れしは。宗然る説あひ。上件の師説も大祓詞後釈に見えとり。其は大祓詞に畜犯罪とあは同事を。古事記に馬婚牛婚雞婚犬婚とあひ。此も皆飼物ある歟以て知ばし。

さて六畜と云も馬牛雞犬に羊豕を加へて云あまど。此は漢土の定めて。元は皇国の事に非ず。然るを漢国にて羊豕を食料に飼おく故に云ふまど。此二畜は元より皇国に産れる物に非ざまも。古事記に馬牛雞犬を挙とるは古へより。天武天皇紀に。莫食牛馬犬猨雞之宍。とあり。猨を加へられとまど。此も飼置て益あき物あり。漢籍襄陽記と云物に。雞主司晨。犬主吠盗。牛負重載。馬涉遠路。云云とる。古へ叫ぶる説あり。強て飼物を加むとあらば。猫をや加ばらむ。此も必飼ふべき物あまぢあり。

○定其療病方。療字を。舊く袁佐年と訓るも惡から。其も続紀四の詔に。御病欲治。まと九九に詔て。御病乎治賜比あぞも有れむ。久須く琉と訓ばし。舊訓を集めとる玉篇に。然る訓の有まぢあひ。此も已猶若き時に下に注せる久訓まく欲き由を。信友に須理の考を書て。療字を久須琉と。後に見出て告遣せとる語りしゝ。然るもまぢ。久須理を云語も。いちゝかも古語の様を知とらむ者も藥師の術

はゝと藥の病を治むる事に奇異ある故に其物を久須理と云ひ其を以て病を療ぢ人を藥師と云あらむとは誰も思ひ寄あとあぢら久須理に久須流てふ活語に體語よあまるよて本は貼傅るあとの古言あるを皇國よて藥を用ふ法あを貼法を始れる故に其を名に負せと法ふて古へハ久須理とも久須泥とも云ひむと所念も今も物を指貼るあとを久須理貼るとも云ひ久須理貼るを久須許須理貼るとも云ひまた久須具流と云語も躰に指を出り付ふ狀あど由有げあり

然るに本草和名に石斛者山精也又石精也出神仙服餌方和名須久奈比古乃久須禰一名以波久須利也和名抄に有りて石斛石草之名也図經云五月生苗莖似竹節七月開花十月結実と云へり今に古きに依て本草和名を引き故

あを久須禰とも久須利とも云る證あり須久奈比古乃久須禰と云に少毘古那神の藥を云ことよて諸藥あに神の御靈に賴ざるは有はじき中に此藥ハ殊に用給へる故に當昔を思かく名を負へるれらむ以波久須理と云に此草ハも石斛山精石精あを漢人も名けとる如く岩に著て生る物あをば久須理と云に貼る義あは故に名を負法ふ岩に生て久須理に用ふ法物れる故に有るに何を見ても久須理久須禰同言とに通え多也類聚名義抄に黏或黏相著クスネとあり世に祝とて固く物を粘る物あるに古語の遺れるあるべし

ちて藥を用ふるあと貼傅るを始を由に同書

ふ。芍藥、一名解食。和名衣比須久須利。一名、奴美久須利と
あり。和名抄よも。唐韻云。芍藥、萬芚也。藥草可レ和レ食也。新抄本草云。和名衣比須久須里。又沼美久須里と云り。
は於奴美久須利と飲藥よて。おまを藥ハ。傳るゞ本ある故
よ。飲て病を治ル藥をば。殊ふ飲藥とは云ふ例ひ。然も云らむ。飲
む藥ハ芍藥よ限ら祢バ。餘藥よも然る名の有べきよ。然
らぬは如何。おど云人も有おむゝ。此ハ漢籍ふ可レ和レ食と
云ひ。一名を解食とも云如く。食物の滯れるを。化安能の
ある故よ。是のみハ早く飲もおれむ故よ。此藥ハ比みか
かふ名をば付らむ。然るを後よは。飲藥の方ハ漸くふ精く弘く
負せ於らむ。
おひし故ゝ。はと更ふ傳藥といふ語も出來よれむ。万の事か
く様よ轉りもてゆくハ。世の常おひ。
凡て衣比須と云語ハ。常よ異きる事物をいふ語おひ。蕃
を衣比須と云も。御国人よ異ふれば云ひ。ふ不委くハ。神武天皇巻の哥
よ。衣美斯ゆふる処ふ注ふを見べし。久須理ハ傳べき物ふるよ。飲むハ異
ある故ゝ。衣比須藥と號ケるおひ。猶言はゞ。上ふ大名牟
遲神の。赤裸ある兎を治し給ふよ。蒲黄を傅し奴。はと此
神ハ。猪よ似と祢燒石ふ。燒著れて死給ケるを。蚶貝比賣
は蚶を焦し。蛤貝比賣ハ水を以て。塗母乳汁しゝば。愈多
る例どを思ふ祢し。塗傅とる由おまバ。飲と祢事ハ例く。
但しかく言はゞ。其ハ赤裸と。燒爛とを愈せるおまバ。傅
藥よて足る故よ。用ざるおひ。ゝ例ぜ云人も有例むの。然
れど。兎ハ然もあらバ。大名牟遲神ハ。死給へゆゑ
さ有るを。飲藥も有むゝハ。用ひ安て有るゝ祢きゝは。神
世ハ更おひ。人世とおひても。最上れる世よハ。藥を服奴

る事。多くは無ひとれむと所念也。吾情は本おなて思ふは
き故に。今世にも誰ふまれ。過ちて身を打損へる時れど
は。阿那痛と云。さはは。所念えば。指は津吐を紛れて。久須
る事あり。是ぞ皇産霊大神の賦て賜へる。良医の性は。
やがて久須理の始ふる。口ふ苦しき飲薬れ後ふるばき
こと。是を以て其れ此時。二柱神れ定給ふ病を療に法
も悟りおべし。

方ぞ云ふは。種くれ傳る久須理れ更ふ。飲薬れ方をも
多く定免て。後の設と爲給ひれむが。かく云由れ。大同類聚方。神遺方ふどは。
此二柱神れ傳ふ給へりをいふ。飲薬の方れ多ら上代
るを以て云ふり。此二書の事。れふ下は云を見て。
は人情おれおろら恬憺ふ事少く。純固質朴ふて。健然ふ
きむ。裡を已發る病の少有し故は。後れ如く飲薬れ用ざ
れむろし。彼事多く。ちらしらぶる漢土にらも。上古の
人れ。春秋ふ百歳を渉りて。動作衰へばと。

素問の上古天眞論と云は見え。恬憺虛無眞気從之。精神
内守。病安從來。ふぞ云るをも思ふべし。ふれ漢籍は。かく
る類れ語れ甚多らはを。
今れ其端をいふのみ。ちて方字は美知と訓ゑし。師云。此方
をサヽとも訓きど。コ
然は訓ばくぬ非ぞ。此れ療病方れ。人草は更ふ已。人草は
要ての畜物の病を療に方を。人の知ばく教ふ定給ふる
由は。總てれ鳥獸ふ。其病を自治ぞ方を。某くふ定免教
ふ給へり。と云ては非ざる已。古來れ注者。みふ思ひ謬りて。物等の自然は。其病
を治ぞ方を知れる事を。此は係て釈るれ非ふり。彼者等
れ。譬へば犬猫ふぞの病ある時れ。自ら稻葉ふ似る類
の草を食ひて吐き。翡翠と云鳥の。岩間れ穴は巣を作法
ゲ。蛇れ入むる事を恐きて。穴口ふ。蛞蝓と云虫れ粘汁を
に已置き。蜘蛛れ蜂ふ刺れとるゲ。芋れ葉を齧おれ。大魚
は身をうち傷ハきとる小魚どもれ。眞水れ入江ふ來て
愈ぞ類も。云もて行れば。神の御靈は賴りて。自然の如
く知れるはれ有れど。此れ由緣とれ事異ふ已ろし。然

れば上より云ふる。牛馬雞犬あぞれ病を療ふ方なも。道ふ志ざせる人ゝ。明矣居べき事ふこそ。○鳥獸昆虫之災異。

鳥獸ハ。和名抄ふ。爾雅註云。二足而羽者曰禽。和名与鳥同止里。一說飛曰鳥走曰獸。總謂之禽。毛詩注云。鳥之雄雌。和名上平止利。鳥父也。下米度里。鳥母也。不別者以翼知之。右掩左雄。左掩右雌也。と有ゐ。

篤胤按ふ。右掩左雄。左掩右雌也。と有るは。道理ふ違ふ卍と所念也。然るゝ凡て。男ゝ左上とる定まりあるを。若くは。此抄より引誤れるゆやゆ思ひて。尓雅の本書を見るゝ。異ふ事ふし。いのて其。寔物を試し見ばやと思ひ給へ。暇ふくて年月過ぬるを。教子れる。下總人宮負定雄ゝ。齡若ゝまどかゝ事ふ。心なを用ふ性ふ。即雀烏鳩ふぞ。其ゐゝ雌雄ゝ分ち難き物等を。ゐのまゝ試みふ。果して。和名鈔より見えゐる所をゝ異ふり。其後ふ。本草綱目なを見まゝ。陶弘景ゞ說。まゝ日華外どより云へる所も。共より。其翼左覆右者是雄。右覆左者是雌。と有卍。然れば爾雅の說誤ふ。こと炳焉し。ぞ云ふり。寔ふ然る說ふり。ふれこれ定雄ゞ。禽獸草木より限らば。万物より雌雄牝牡ある事なも考へて。委く記せる物あり。獸を氣陀母能と訓むゝ由ゝ。既ふ注ふ卍。昆虫ゝ舊く波布牟志と訓るを用ふ。ぞし。繼躰天皇記より。伏地之虫と有ゝ。かく訓ゝり。和名抄ふ。蚊行唐韻云。虫行也。訓波布。ぞ見え。虫唐韻云。鱗介總名也。与蟲通用。和名無之。とあ卍。大祓詞より。昆虫乃災と。ゐるより就て。師ゝ後釋より。雄畧天皇

れ御歌よ。波布牟志母ゆあり。虫は這ふ物ある故に。凡て虫を然云ふ。鳥を飛鳥と云ふに同じ。かれまと雨を。ふる雨。花を。さく花。と云類ひも同じおとあり。大殿祭詞よも。波府虫能禍無くゆ見え。十種神寶の中ふ。蛇比禮。蜂比禮あどなるも。其を拂ひむ料ふ。上代には民の住所。野山ふ交て。假初ふ構ふ。しらば。虫は害多ゆ。しふ。また大殿祭の祝詞ふ。牙ば。上代には。唯ふ。此害の多有しよも有べし。今世とても。蝮。蜈蚣。蜂。刺れて。惱むおと無きよ非ず。ゆ。ふの。此ゆ猶精く言はゆ。凡て此れ鳥獸昆虫は災異とあるを。某の鳥獸某は虫ふど。名ゆ。ふ言むは。中くよ精からば。凡て禽類まと蟲類。ゆ。何ふ。ふ人草は更れり。

畜産よも災害を。ふし。異變をふ。物を云。と。弘く見ふ。ばし。ふ。大きよ云は。ば。草木よまれ何ふ。人の要と。れる物に害。ふ。ふ。やゆて人よ災害をふ。謂れ。ば。其をも兼て思ふべし。鳥の穗をゆみ菓ゆとり。獸は。穀物ゆ喰害ひ。虫の木草よ付おとも。悉く人の災害よ非。ざら。め。其は物等は。殊ふ人は爲ふ災異をれゆ耳ふらば。彼等ゆ性のまふ〳〵爲ふ態も人の爲よ宜からぬ事は。即人は禍ふ。ば。呪術を以て禳ハふ〳〵事ども。今世よも多。は。を以て辨ふ。ば。然るは此世は。神は御世ふて。人の現世ふをるは寓居ふふゆ。物等は。幽世よ屬く理ふる故ふ。神は御定ゆ坐る法は。自然ふ。應へ畏む由ふふ故と思は。ふ。此理は。上よも下ふも漸くよ云。るを。思ひ合せて知べし。世人は凡て異変と云。ば。狐理の名ゆみ云ゆれ

ど。弘く心を著て察るに。実に物として。異変を為ざるに
あらしと見も。多く其中に。狐狸あぢの態に。常多らに故に。
此等ゞ名をはみ指。あるまじど。凡て物は異変き態をあはに。
神に属けざあり。然れど物の異変に。物にとりては異変
に非ず。常性れるを。人とは世は異あ
る故に。人は異変と思ふぞ有れに。ちて世に小兒の病
を。多く虫といひ。大人よも何虫彼虫を云ひ。田虫。目虫。水
虫あど云も。実に虫は能態あるゞ有て。呪術にて治るも多
かり。然まだ是も神世を巳の古語あはばし。但し此に尋
にた信ざる事あるゞ。已も前にた。多く言種とれみ思
ずりしを。西洋人は説に依て。微き物を見る目鏡
をもて。田虫。目虫。水虫。まと疥癬あどの類を見さるに。極
めて微き虫の有しあり。人の躰中にも虫多きこと。近頃
出さる虫鑑と云書を見ても知べし。ちて災異は。災害異變は義を以て。書
れとはにめ有べくまど。舊く和邪波比を訓るに従ふば

し。神にまれ物にはまを幽界を巳吾に害とれる事はある
を云語あ巳。委くは第四十三段。万物之妖悉発矣。と
ある処に注せる師説を見て知べし。○禁
厭法は。前にた。麻自那比能
和邪と訓しうど。古本に。麻自那比能〻理と訓
はに従ふばし。今本に。禁厭を。マジナヒヤムルソリ。とあ
り。古言様に。禁厭にて。マジナヒを訓り。前
漢書高帝紀に。東遊以厭之。注に。禳也とあ
巳。平春海云。小右記に。麻志奈比とあり。麻自那比の麻
自は。御門祭祝詞に。麻自許利。大祓詞に蠱物。あどある麻
自と同言にて。那比は上那比。商那比あどは那比を同く
辭あ巳。蠱を麻自と訓ばき由は。字
鏡に。蠱万自物と有是あり。ちて此三詞の麻自。も
を同言にた有れど。かく活きて三に別きる上にては。輕
重と物との差別を成せり。其は麻自那比は。麻自那閉。今は

る詞あり。麻自那布。麻自那波牟と活きて。輕く聞え。麻自許理
て。麻自許禮。麻自許流。麻自許良牟と活きて。重く聞ゆる
が。麻自物て。吉ふまれ凶ふはゑ。其麻自ふ用ふ物を云れ
ゆ。大祓詞よ。蠱字を書るをもて。凶物とのみ思ふばゝら
ば。彼詞ふ。此字よ書るて。人の為よ。凶き麻自術を構へ
ある方ゝ就て。此字て漢籍よ。蠱毒といふ邪術ありて。其
造方あどを。委く記せる事れある故ふ。姑く當て書るよ
こそ有れ。麻自物てふ物て。皆此字れ如く。凶き物よて非
ず。其て第百四十三段よ見えと。天忍雲根命ふ。神魯岐
神魯美命の賜ふる。天玉串も。眞水を術出
玄料れ。麻自物ふ。ゆを以て辨まふべし。ちて麻自那比
れ方の輕く聞ゆる由は。まだ此詞れ本て。交の麻自ゆ同
言ふゆゑを思ゆ。其て麻自理て。此物と彼物と交るを云詞
れゆを轉りて。麻自那比と活き。此詞て。彼方れ體ふ。此

方の靈を交ふる意ば。ゆの有まで。れゆ。麻自許理を。道饗祭祝詞よ。幸字を書るよ以ても。交とも。同言ふりとて知ゆ。麻自許理れ方の重く聞ゆ。ゆ由て。まだ麻自那比の那比て。上ふ云如く。辭ふる故よ輕きを。麻自許理れ許理は。凝よて。麻自よ凝れ添ゆとゆ。マジナハレテ。其ふ。ふる義と聞え。古言梯よ。マジコリよ。眷字を。ゆてとり。許流許禮ふゆ活ゝる事と所聞れで。れゆ。今此ゝ注ふ說等を。委く心得れむ処ゝよ云を。味ひ見て。自然ふ曉り辨ふべし。きて。末ゝ右の詞ども。れ。出とら
ふ能流とは。人よ物を云聞ゆとふゆ。己ゞ名を人よ云
聞ゑ残名告と云ふて知ばし。ばと法を能理と云も。上を
ゆ云くせをゆ。定ゆて云聞せ給ふをゆ出とゆ。ゆを有ゆ。然まを

で禁厭の法も神々れ云々せと詔給へるあまバ能理といひ此法より験ある事ハ其御法を畏む謂より外れ有れる○序ふいふノロフハ法とり出さる詞ふらむ〻ハ。○百姓ハ意富美多訶羅と訓ゑし。舊訓よも然ハり但しオヽンとあるハ意富美の言便ふり江家次第ふ公御賦と

ハる義よて諸ハ民と云ふゑ外ゑ。但しタカラと云詞の由ハ知らゞ或説よ天下の宝物ハ田自出る義よて穀物ハ重宝ふる由を著せる詞ふり云り然も有ばきゝ○鋏胤云多訶羅ハ高と同義よて良ハ添さる詞ふるゞ移りてハ多詞理多訶琉ふども活々るふばべし領地の收納を高何石と云ふぞも即宝の義と聞也故書紀ふ人民万民兆民黎民民庶ふぞれ類を皆然訓ゑ字典よ百姓民庶也とあり天皇巻ふ注せる師説を見て知べし○至于今ハ書紀を記さきと体當時を云ゝ若くハ書紀ふ採られし古書よ本を有し文ゝもし然も有らば其時代ハ

知ばゝらゞ○恩頼ハ舊く美多麻能布由と訓るよ依ばし。まと布恵と垂仁天皇紀よ頼聖帝之神靈景行天皇紀も訓ゑり。ふ皇靈之威神功皇后巻ふ皇后の御語ふ吾被神祇之教頼皇祖之靈云々蒙神祇之靈ふぞも有ゑ。ふ不巻々よ數多見えとり。

天慶六年日本紀竟宴よ得大己貴大神矢田部宿禰公望国平し桙ハ末を伝へ來る美太麻農扶由はゝふぞうれし紀ふど有り。○因ていふ此哥の末ふる詞書よ伊弉諾尊天の瑞を下して青海原を探り得てのち国々を生て次よ大名持神をうゑり。みとまのふゆハ。まゆゑるふるばし。と有ハ都よ古傳よ合ざる詞書ふり此程ハ博士さちの何どてかく古傳を知ざりハむ。信友云美多麻は靈を尊びゑ詞布由ハ震ふれ義よて神ハ靈の威を震ひて。

殊更に幸ひ給ふを。辱み稱へて。美多麻能布由とは云へ
ほふ。天皇の御魂に申しも。凡人の魂に云も。同じ意ぞ有り。布由。布留同言ふほ
證に。古事記明宮段に歌ふ。大雀佩せる太刀。本打る祀末
布由。とを。布由に。布留と同言にて。大刀を揮ほ狀を
い。布由。布留同言ある由に。記傳に論れとはぐ如し。はと神靈ふ布留と云る
事ハ。神の出行ふ供奉るを。振奉。布理出奉れぞ。古記ぞも
に見えと。其に多くは。神輿に扶きて云へほ如く聞も。
れど。言に本は。神靈に威震ひ給へる由を。畏み稱へる
。大鏡に。春日に大神の事を。帝に京に遷し給ひて
に。はと近くふ。奉て。大原野と申し。ふも近くぞ。

又ふ。奉て。吉田と申て御座に。此吉田に明神に。
山蔭の中納言に。ふ。給ふるぞかしぞも見えとゆ。後世の行
列に。フルといふ言のあるも。威震ふ意ありまゐフルベ
ヒと云も。フルを活らせとほ詞にて。安康紀に。威儀をと
。れるれぞ叶ひて聞も。万葉三卷。大伴家持卿の歌ふ。丈夫之心振起。
劍刀腰爾取佩梓弓靫取負而天地與彌遠長爾萬代爾。如
此毛欲得憑有之皇子乃御門乃云くぞと。心振起も。
心震ひ起ふて。布理に布留比の約とる。今俗に。心を振ひ起に
ふど云ひ。まと威ふ震ふふども云。はと雅言に。ふ。ふ。さ
け。ふ。は。ふ。ふど云ふ布里。殊更に心に。ふる由れり。此
外に。ふり某ぞ云布里。古き魂ふ。布留。布留比。布里。布留
ぞい。ふると。其意ば。ふ。ち。ふに。相同じ。ぞも思ふ。天

武紀ふ。招魂を美多麻布里と訓み。臨時祭式ふ。鎮魂祭を。於富年多麻布里を訓るも古言ふて。天皇の御魂れ威震り給ふぼく。奉仕ふ由の稱をおそ思れるを。今云此事れ。神武天皇卷。鎮魂祭の下ふ注ふを見るべし。斯て布留比れ本語は布留ふて。比布閉を活用く辭ふるを布由とも云ふふ依て。殊ふ親しき音ふ。美多麻乃布由を云ふふるぼし。曾根好忠集ふ。暇無みゐひれを身ち矛急ぐの れ。御玉のふゆと宜も云けア。清輔朝臣奥儀抄ふ。此歌を舉て。歳れ終ふ。込魂を祭りて。恩德を報ぜとて。御魂の冬といふ謂ゆふ荷前祭ふア。と云きとるれいかゞ。但し昔れ年れ終ふ。荷前使を立て。定

まれる陵墓ふ。幣帛を奉られ。又 れぼるも年終ふ。祖くれ靈祭ふ例ふアけきで。其祭を御魂の布由と云アし由 れア。其れ祖くれ靈の布由蒙らむとふ意ふり。好忠主の歌も。然もやと聞ゆげふア。清輔朝臣の。フユを冬の義と心得られとるれ誤ふり。○今云御靈れ布由てふ言れ。布由をまと布惠とも有れむ。前ふれ谷川氏の。殖也と解ふをりて有しゐぜ。此說ふ依ぼく。○皆有効驗ハ。療病方。禁厭法の。皆効驗ある由ふア。其療方ハ。大同類聚方。神遺方れどふ載とふ方等ふて。彼恩賴を蒙れる百姓の家くふ。傳れまるを。聚られと ふ物と見えとゆ。平城天皇紀。大同三年五月の下ふ。此書を御撰ありし事を載さまとるゞ。其処の文ふ。先是詔と云ひ。遺命とも有て。先朝桓武天皇れ詔命ふ依て成まる由見えとり。委くは此書れ附考ふ論へ

るを見るべし。神遺方は、丹波康頼、貞観十年より撰ばるる由その自序より見えたり。けて類聚方ハ。もと百卷ありけゞ。今傳れる本は。一卷より巳廿四卷まで闕たり。此を信友の説より。始め二十四卷は。禁厭法ありとれども。別ふ傳へたりけゞ。失たる物ゝと云ふ中ゆ。此説案然も有ばくれたりも。然るに二十五卷の初めを。加佐夜萬比と云へる舉とは本を思ふより。此は漢籍より。風者百病之長也ゝ云て。諸方に始より論ふ中る例ふ効ふ中る物と見ゆまで。神遺方も藥方なれ。伽坐耶万比と云へる舉とるをも思ひ合せべし。然れど始了載ゝむ禁厭法に。漢籍めゝと思ふ後、世人の刪巳失ある事ハ。違有まじく所思也。然るを出雲本として。或人に傳へたる本より。末ふる用藥の卷くを初より舉て。卷數を合せたれば。後人の

杜撰れるおと疑れたり。抑後世の藥師ども。禁厭法をば都ふ用ひぬ事と成ぬまども。我ゞ古に。上件の由緒あきば更よも云はゞ。赤縣州より。古は禁厭を專と用とりけ巳。其に彼国の醫術にも巫祝の徒を巳初巳しゝばふゆ。そは山海經と云書より。巫抵、巫陽、巫履、巫几、巫相ふど云ふ巳て。注より。皆神医也とあり。此に呪禁、祓除、呪詛れぞを行ふ者ふゞら。其術をもて病を愈也故より。そを醫とも云りと通也。其に内經賊風篇より。先巫知百病之勝先知其病所從生者可祝而已也と云るをも思ふべく。まと古今医統より。巫咸に。鴻術を以て堯の医とある。祝して人の福を延べ。病を愈し。樹を祝ぬれば樹枯。鳥を祝ぬれバ鳥墜ふどもあり。けて其呪禁を行ひて。病を治ふ本趣に。説苑に云書より。上古之醫。苗父之爲醫也。以菅爲席。以芻爲狗。北面而發十言耳。請扶而來。輿而來者。

皆平復如故と有を以て知ばし。発十言とて呪文を唱へとる事を通え菅席芻狗あど古意より叶ひて聞あるて下より云如く大名牟遅小名牟遅神て外国くより往來まれる神あれど彼神さちの傳へ給ふるが遺れるけて此術を行ふ者を巫醫といふ論語法を通えとり

ふ人而無恒不可以作巫醫を而ふ是ふ巫此を巫と医と二ツ見さる説て非ふり其て汲冢周書と云物より郷立巫醫具百薬以備疾災畜五味以備百草を云るをもて巫と医を二ふらぬ事を知べし

けて漸くより呪術をば次ふれして薬を服ゑむる事を專と爲る者も出來し故より周と云し代ふれ巫て官を立ふより巫を醫を別ふせ巫其て周禮を見ふより巫の外ふ醫師と云官而巫て掌醫之政令聚毒薬以共醫事と云ひまと疾醫を云有ふ掌養万民之疾病と見えと巫別ふ

立ある故より前の如く巫彭巫咸ふど称ふことと止みて春秋左氏傳ふどを見るより医を業をける者をば医緩医和ふど云ふ事をてれりしふ巫其後隋と云る代と外りて古て巫と醫ハ一ツふ巫ゑ故寀より依れるを見えて尚藥局より呪禁博士呪禁生ふど云を立て醫の次よおき呪禁博士と云ゞ呪禁生より呪禁祓除ふどれ術を教へる病人ある時て醫と共ふ預巫唐を云し代れ令も是ふ効ふ巫と見も此等のふと委くて唐六典といふ書を見て知べし

偖まと皇国て右れ如く二柱神さち療病方と禁厭法とを始給へる正き傳の有ゞ上より孝德天皇れ御代を巫唐制を用ひて官を置れし時ふ此制の古ふ符へ法事を所思看せ法事と通えて典藥寮ゑ醫師醫

博士。醫生の下ゟ。呪禁師。呪禁博士。呪禁生を置れゝと。其は職員令ゟ。呪禁師二人。掌呪禁。呪禁博士一人。掌教呪禁生。呪禁生六人。掌學呪禁と見え。醫疾令ゟ。凡醫博士取醫人。内法術優者爲之。呪禁博士準此。まゝ呪禁生學呪禁解忤持禁之法。義解ゟ。謂持禁者。持肌刀。讀呪文。作法。禁気為猛獸。虎狼。毒虫。精魅。賊盜。五兵。不被侵害。又以呪禁固身躰。不傷湯火刀刃。故曰持禁也。解忤者。以呪禁法解衆邪。驚故曰解忤也。といへ。邪ど有を辨ふ。医疾令に今欠ゝ。此に政事要畧ゟ引あるを。再引とるゝ。但し此に和漢をもゝ上に令あるゞ。民間に如何と云ゟ。療方と呪禁と竝用とゝゝと。皇国に更あり。此ハ物語書ゝを。普く見れゝとして知るべし。漢土も同様ゝ。邪しゝを。千金方。儒門事親ゝど云醫書どもゝ。

呪禁法をも多く載とゝを見て。彼国の明醫らゞ。民間ゝて。病を救ふる有狀をも辨ふ。孫思邈。張子和ゝど。或人ゝゝ。且くも医道を知れゝ故ゟ如此。彼東垣。丹溪ゝど云を始め。餘り陰陽五行の說ゝ泥める医師どもの。著せる書等ゟ。呪禁の事に見えざるに。凡て医道に眞理を知らざゝ徒ゝまゝバ。然るを後世に藥師どもに。呪禁法を陋と爲る事に。古道に知ざまゝ邪。此に史記扁鵲傳ゟ。信巫不信医。不治也と云ひ。素問の五藏別論ゟ。拘鬼神者。不可與言。至德ゝゝ。此に医のもと。巫より出る事ゝ。忘まむと為る。ゝり。凡て病は。邪ゝる鬼神の。邪気を立ゝ。鬼魅。遊魂。鳥獸。昆虫。災異を。ゝ起る事ゝる故。療方ゟまれ。呪禁ゝまゝ。其病を治め。む。と行ふ事に。正しき鬼神の雲異ゟ。くる事ゝ。ゝまゝ。其道ゟ至。ゝらむゟ。共ゝ効驗ゝる。ゝと。何ゝ疑ハむ。藥ゟ禁厭の意ゝり。禁厭ゟ藥に意も。ゝの物をや。其に右ゝ云如く。藥を用ゆる事に。呪禁と。り起る故ゟ。何ぞと云ゞ。呪禁に風交ゝ。譬へに瘧

の截藥も一夜屋棟より晒して用ふと云水腫病の藥を煎る水は流川の水を流ふ〳〵隨より汲て用ふとも云類今數冥尽にべくも非ず皆其如くなて必験あることぞ漢土りて醫方書れ祖と云る。

傷寒雜病論より甘爛水法燒禪散方あどは禁厭あ卍を

は知らぬやも然らば病より禁厭さより行はゞ藥も用ひ云云も有れむりを云ふ然らば藥方と呪禁と其験の互り似ると云のみ其異あるあとも譬へば敵を平治るより說客を用ふると兵器を挙て服ハしむる

との異あるあるが如し其も藥も能異あまず其往所も異より方法と病證を〻く符ふ時

も直より某〻の病あるる所り向ひて攻破り或も人〻身ふ固有る神気を佐けて追散云れぞ兵をもて敵を挫ぐ

を〻く似とり〻はと攻撃の藥を用ひて験あ卍し後は補ひ

の藥を用ふる事も兵を挙て敵を平治とる後ふ仁慈を

施して安むはより似とり敵とし云冥む兵器を用ふべき

物とれみ思ふを豈良將やしも言むや病より藥のみ用

ふるを豈良医としも言むや是み乳此の二柱神の療方呪法なの祢て。

始給牙る恩賴り依る事よぞ有〻はあ下より注ふ○作多見るべし始酒之神也おは私記より少彦命是造酒神也とあ卍此も

決云て古傳の遺れるあ卍但し是〻卍前より須佐之男大

神れ遠呂智を斬給ふ處より酒を釀云云給牙る事見とき

ども彼處も其事れ見とる始ふおそ有れ少毘古那神も

天地初發の時をりの神より坐ぢいを早く始置給へる故

り彼大神も其法を知看して釀し米給牙る乳はなし石屋

戸段より大御神れ御詔より尿醉而吐散とおそを詔牙る

を以ても酒造る事のいと早く有しこを知べし古事記

裡書まと本朝月令ふ引とる日本決釋より應神天皇れ御

代をり以往より釀酒れ道を知ざ卍しと云おと有まど

其も彼卷ふ論ふを見べし。

けて崇神天皇紀より高橋連活日を云人天

皇よ神酒を獻ぴて。此神酒ハ。吾御酒あらば。倭あば。大物主ぬ釀し御酒。幾久〳〵と歌ふる大物主は。大名牟遲神の和魂ぬ御名ふるおぞ。下よ見ゆふ如くぬまで。少毘古那神と御心を合せて。藥を定給ふる事を。及て。共よ係て稱せるぬ依ばし。○久斯神ハ。神功皇后ぬ御歌ふ。此御酒ハ吾御酒ふらば。久志能加美常世よ坐ば石立ば。少御神の云く。ぞ御詠坐る久志能加美は酒之神ふぴ。其ぬ横井千秋說よ。久志を酒ぬ本名よて。應神天皇ぬ大御歌よ。須く、許理賀迦美斯美伎邇。和禮恵比邇祁理。許登那具志。恵具志爾。和禮恵比邇祁理。とゐる二ッぬ具志おまふぴ。おぬ

上をり連れる言ゐる故よ。具と渭れぴ。ちて御酒白酒黑酒あど云伎は。此久志の約れる名ふり。其を佐気とも云ぬ。示名よて。縣居大人說よ。酒を佐気とも云ぬ。是を飲ぬば。心ぬ栄もる故の名よて。佐加延の約ぴとゐふぴ。と有るゲ如し。ぞ言ゐぬ。冥然る說ぬぴかし。但し加美を。神よは非ぬ。上ふりぞ云るぬ。餘ぴよ釈過ふる說ふて。信ゲさくおぞ。偖まと師說よ。契冲ぬ奇之神ふりと云へる。縣居大人ぬ。奇ハ用語ふれど。之ぞ云ばらば。藥之神ぬぴ。須理の約志ふぴ。と言きさり。信よ奇之とぬ云ぬふぞ。はと藥之神と云むも然ふとおて。正しぬ由ありと有ぴ。然れどぬ千秋の加美ぬ上ふり。と云說よ依られと說ぬ信ゲさし。是よ就て思ふば。酒を久志ぞ云はぞ。で藥と同語ふらむ。其ぬ酒はもと病よ久須琉とて。

造り給ふるよは非ぬども。久須理てふ名は。既よ病を治
ひ物の名とあめて後よ。酒たをく病を治し。心を和ひ物
ふる故よ。久志てふ名を專と負けむ。久志去あむち久須理の約り。上ふ
引さる應神天皇は御歌ふ。許登那具志恵具志とあるは。
師說よ。事和酒咲酒よて。飲ぬ諸は憂事哀事は和さむ
酒。おもろく咲榮ゆる酒。と云意ぞと言れし說を思ひ。
猶委くは彼卷よ注去を見べし。荒木田久老の區志考と
云物よも上引さる高橋連活日ゲ哥を此御哥とを引
て大汝少彦名二柱神の酒を造り初ぬ給ひてしをり。藥神
と申奉り。藥神と申奉るをり。療病方を定むとは舊辭よ
語り傳ふしあるべし。漢國は言よも酒は百藥は長と云
る言の所ふをも思ひ合して。と云るは。二神を医の法
を始とるよは非ぬと為とふ僻說あり。凡て彼區志考と
いふ物は。いと異ふ說なれみ言むと為とる書ありけ

ひ。其は下よも往く辨ふるを見るべし。はと漢土よて。藥は始は酒よて。上古
は是を用ひて。病を治せるをひ弘ぬて。草根木皮は不種
種は物を。用ふ事とあまふ思ひ合去ばし。然るは醫字や
ゲて酒醴の事あり。周礼天官酒正職よ。辨四飲之物一曰
清二曰醫と所めて。疏よ。清醴清也。醫者謂釀粥為醴と見
え。集韻よも。醫渭漿也やも有は。漢の上古も。今用ふる藥
は去あく。專と酒醴を用ひて。病を治せる故ふ。其後品くの
藥を知て用ふる人を。醫と云こと〳〵あまひと見も。醫と
も作は。もを巫の始とる業あまぢれり。礼記よ。酒者所以
養老也。所以養病也といひ。素問の湯液醪醴論ふ。古酒を
用ひて病を治せる事見え。其湯液と云は。清酒のこと。醪
醴と云は。濁酒を云。ひ。彼國は酒は造り始あるりも
所き。其やゲて此ふ神さちの。御雲よ依てふ事は云
も更ふり。はと按ふよ。漢ふて藥方は名を。桂枝湯葛根湯
あど云ことは。酒を病り用ふる事を弘ぬて。草根木皮を
用ふる事を。も直ふ其主とる藥の名をとりて。負とふ物
とおゲも。此湯字を。あゲふ某藥を煎さる湯も去よ云。と

心得むと。深く古を考ずさる諺りと思ふと。如何有ラむ。此と彼二柱神の。彼国ゑ往來(ユキカヒ)
志給へる故よ。其道も。自然よ傳はる所以(ユヱ)をおそ所念(オボ)
もれ。然るを後世は藥師(クスリシ)ども。漢籍ふ依て。彼国風は醫術
をば且く知まゝど。醫の眞道を知まる人をば。いまゞ聞
ば。其は神道を知おを外むと。醫道は本ありけるを。抑世間の万は事。悉
く神態よて。四季晝夜は往來。世乃治乱。風雨映冥のみあ
らず。人は現ゆ為ゆ事も。皆神の御心よ漏るゝ事あく。此
は師說よ。人は譬へば人形は如く。神は人形を操ふ人
は如し。と云れとる如くある中よも。醫道は別よ神道を。
明ふ知辨へ爰は得有(ル)
まじき道ありけり。其本を務(ツト)ゑて。道を成さむと思ふ
人は。此は二柱神の御靈を常よ祈願(コヒノミツ)奉るべき事よおそ。
世の醫師とちは。諸越は神農氏と云るを。医道の祖神と
斎くことあまぎも。彼人は医藥の術を始ゑとるゆは非

ざるをや。此事別よ記せる物あり。○因ふ云ふ。大社志よ。
狩野永雲と云人。大神をゆり。鼻の高くある草を賜まる事
あり。いを珍奇(ヂンキ)
き事よおそ。

○門人久保田、綱根云ふ。此は十八の巻は花ぐはし。櫻の
板ふちは密ぬて。洽(アマ)く世ふ薫(カヲ)らおゑむと勞(イタ)ゆく者は。
百おぬは美濃国恵那郡福岡村よ。古くよは住居せる。安
保正員。まと同郡坂下村ゆ。世く家居る。吉村時安と二人
おふゆ。吹渡る風の安ちびふ。速(スヤ)くは。咲ぬてあふ事ぬ
有(リ)ゆる。初帙よは次く。花の色香めては合ひて。かく
美はしは。匂ひ出ふふよ外。

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan